

NAIST ANNUAL REPORT 2024



CONTENTS

目次

学長挨拶 GREETINGS FROM THE PRESIDENT P01-02 未来を共創する大学院大学	目的・理念・歴史 PURPOSE・PHILOSOPHY・HISTORY P03-04	学術交流協定締結状況 PARTNER INSTITUTIONS P23-24	海外拠点 OVERSEAS BASES P25-26
学長ビジョン 2030 PRESIDENT'S VISION 2030 P05-08	共創コミュニティ宣言 DECLARATION OF CO-CREATION COMMUNITY P09-10	修了生インタビュー ALUMNI INTERVIEW P27-28	研究力強化 STRENGTHEN OUR RESEARCH P29-30
Pick up! 研究室（情報科学領域） DIVISION OF INFORMATION SCIENCE P11-12 ヒューマンAIインタラクション研究室	Pick up! 研究室（バイオサイエンス領域） DIVISION OF BIOLOGICAL SCIENCE P13-14 微生物インタラクション研究室	研究環境 RESEARCH ENVIRONMENT P31-34	Activities 2023（研究成果） RESEARCH ACHIVEMENT P35-36
Pick up! 研究室（物質創成科学領域） DIVISION OF MATERIALS SCIENCE P15-16 機能超分子化学研究室	保健管理センターからのおたより HEALTH CARE CENTER NEWS P17-18	Activities 2023（共同研究・産官学連携） COLLABORATIVE RESEARCH INDUSTRY-GOVERNMENT-ACADEMIA COLLABORATION P37-38	Activities 2023（地域との連携事業） REGIONAL CO-CREATION P39-40
NAISTの特色 A FEATURE OF NAIST P19-20	幅広いバックグラウンド VARIOUS BACKGROUND P21-22	Activities 2023（受賞一覧） AWARDS P41-42	財務情報 FINANCIAL REPORT P43-48

未来を共創する大学院大学

大学ではなく、大学院大学

1991年—ソビエト連邦が崩壊するなど、世界が大きく変わり始めた年に奈良先端科学技術大学院大学は誕生しました。日本のほとんどの国立大学で学部と大学院の両方が設置されている中、本学が学部を持たない独立大学院として創設されたことは、時代の変化の一つの現れと言えるでしょう。その狙いの一つは、多くの学生が学部・大学院教育の両方を同じ大学で受けるという日本独特の風習に一石を投じ、学生の流動性を高めることでした。大学院大学である本学には国内外さまざまな大学・学部、あるいは高等専門学校の卒業生や社会人が入学し、多様なバックグラウンドや経験、知識を持った学生が共に学びます。科学や技術における発見やイノベーションに欠かせない多角的な視点や多彩な発想は、こうした大学院大学ならではの多様性から生まれるのです。

奈良先端大のいま

世界約40の国・地域から集まる留学生や外国人教員・研究者を含む、多様性に富んだ本学の特徴をさらなる強みとするため、2018年にはそれまでの情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学の3研究科を統合して全学を一つの研究科とし、学生と教員が分野の枠組みを越えて新たな価値創造に取り組むための大胆な組織再編を行いました。さらに2021年には、多様な本学構成員が協働・協力によって本学のミッションを実現する“共創”を掲げた「学長ビジョン2030」(p.05-08)を公表し、翌2022年には共創を目指す共同体としての本学の理念を「共創コミュニティー宣言」(p.09-10)として取りまとめました。この「NAIST ANNUAL REPORT 2024」でご覧いただける本学のさまざまな活動や成果は、いずれも奈良先端大コミュニティーの共創から生み出されたものであり、また、本学初となるこのアニュアルレポート自体、事務局スタッフの共創による作品です。

奈良先端大のこれから：地域そして世界との共創

「学長ビジョン2030」で掲げたように、私たち奈良先端大は、共創の輪を大学コミュニティーから地域、そして世界へと広げていくことを目指しています。本学のPURPOSE(目的; p.03-04)である「科学技術の進歩と社会の発展に寄与」するためには、奈良はもとより、けいはんな学研都市、関西、日本、そして世界の多様なステークホルダーとの共創が欠かせないからです。共創の基盤はコミュニケーションです。「NAIST ANNUAL REPORT 2024」が、奈良先端大の教育・研究・社会貢献というミッションをご理解・ご支援くださり、共に未来を創造する皆様とのコミュニケーションの一助となれば幸いです。



KAZUHIRO
SHIOZAKI

奈良先端科学技術大学院大学長
塩崎 一裕

PURPOSE

目的

学部を置かない国立の大学院大学として、
最先端の研究を推進するとともに、
その成果に基づく高度な教育により人材を養成し、
もって科学技術の進歩と社会の発展に寄与することを目的としています。

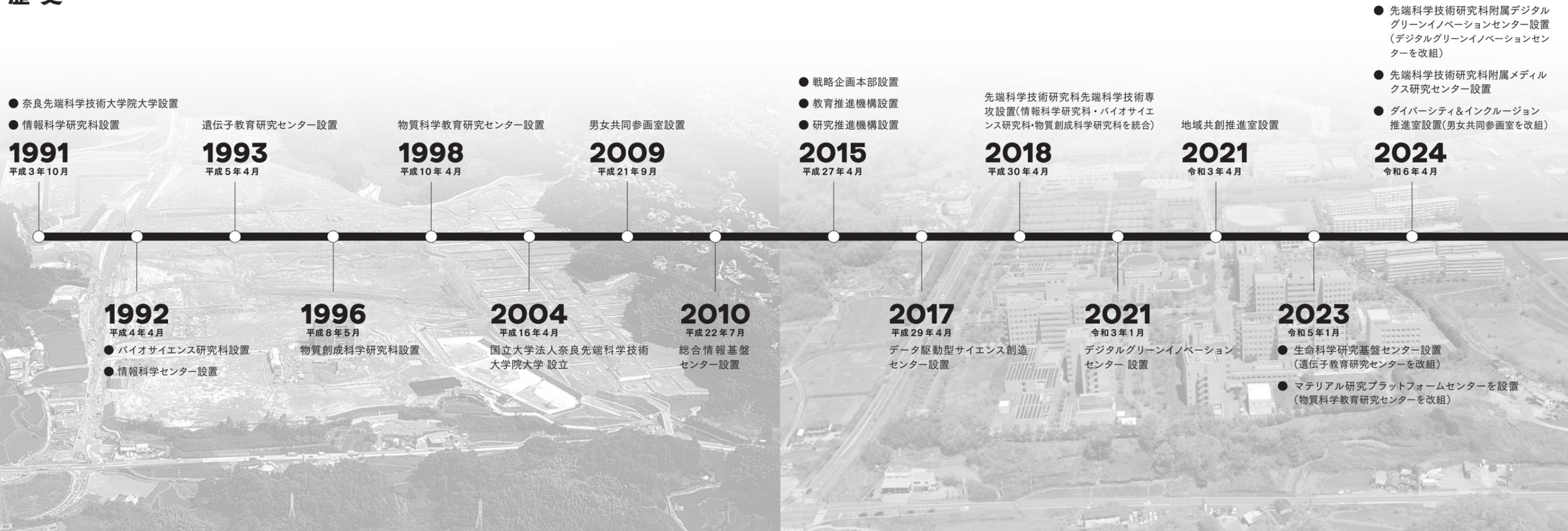
PHILOSOPHY

理念

- 1 先端科学技術分野に係わる
高度な研究の推進
- 2 国際社会で指導的な役割を果たす
研究者の養成
- 3 社会・経済を支える
高度な専門性を持った人材の養成
- 4 社会の発展や文化の創造に向けた
学外との密接な連携・協力の推進

HISTORY

歴史



VISION
01



最先端研究の場で先導的人材を育成する
大学院大学の新たな展開

NO.	目標	戦略
1	教員、学生、研究者が担う 学術研究の卓越性と多様 性の強化	魅力的な研究環境の整備を進めることで、奈良先端大の教員・ 学生・研究者のそれぞれが取り組む多様な学術研究を活性化 し、その卓越性を高めるとともに、優れた人材を引きつけ、研 究大学院としての存在感を高めます。
2	奈良先端大の強みを活か した新たな課題解決型融 合研究分野の共創	奈良先端大が世界を先導する分野をInstitutional Research (IR)によって評価しながら、それらを軸とする課題解決型融合 研究を創出します。学問分野の枠組にとらわれず、社会科学 的視点も取り入れた新たな研究文化を創出します。
3	異分野共創によって世界 的課題に挑戦できるイノベ ーション人材・リーダー人 材の育成	異なった専門分野の学生や研究者が共に取り組む融合研究を 推進することで、SDGsをはじめとする世界的な課題の解決 に分野・文化を超えた共創で取り組む力を育み、多様な視点 で次世代の価値を創造する先導的人材を育成します。
4	国内外の大学や研究機関 との共創による教育研究 の高度化	奈良先端大と異なる強みや特色を持つ国内外の教育研究機関 と連携し、そのネットワークを活用した教育・研究資源の相互 利用を促進することで、国際水準の大学院教育と世界を先導 する研究を推進します。



VISION
02



新たな価値を共創する
キャンパスコミュニティの醸成

NO.	目標	戦略
5	多彩な発想や変化への柔 軟性をもたらす教職員・学 生の多様性・国際性の向上	教職員や学生の多様性と国際性を向上させる人事・学生募集 戦略を推進するとともに、奈良先端大の多様な構成員が安心 して学び、働き、力を発揮できるキャンパス環境を整備します。
6	広く学内外から専門的知見 やアイデアを集約する体制 の強化	奈良先端大の教育研究や運営・経営に関する多様なアイデア や知見を学内外から集約し、議論する仕組みを整備し、大学運 営とキャンパスコミュニティを活性化します。
7	自己実現の場としてのキャ ンパスへの帰属意識を高め る学内広報の推進	奈良先端大で学び、働くことに誇りや喜びを感じられるよう、 優れた教育研究の環境や成果を、教職員や学生、卒業生など と横断的に共有することで、「足元からの大学ブランディング」 を推進します。
8	次世代の大学リーダーシッ プ育成を目指した教職員の 運営／経営参画の推進	大学運営・法人経営の課題に取り組むプロジェクトチームに 多様な教職員の参画を求め、また、学内の人材登用を柔軟か つ積極的に進めることで、奈良先端大の将来を担う人材を見 い出し、育成します。



VISION
03

社会との共創の輪の拡大



NO.	目標	戦略
9	社会的課題の解決に向けた産学連携とイノベーションの創出	奈良先端大の研究シーズや人的資源、設備を可視化して、地域や企業との新たな協働ネットワークを形成し、SDGsやカーボンニュートラルなどの課題解決につながるイノベーションの創出を推進します。
10	社会の変化と進化を見据えた教育プログラムの継続的な整備	企業等とのコミュニケーションを活性化して社会が求める人材像の変化をリアルタイムに捉え、社会との共創によって教育プログラムやキャリア支援プログラムを変革しつづけます。
11	学外のステークホルダーとの双方向コミュニケーションの活性化	国内外、産官学さらに個人、法人など、奈良先端大の多様なステークホルダーそれぞれとの効果的な双方向コミュニケーションを確立して、教育研究や大学運営に対するインプットや支援を集約する新たな協働のかたちを創ります。
12	戦略的なブランディングによる研究力/教育力/社会貢献の可視性の向上	奈良先端大の研究、教育及び社会貢献の魅力をIRによって分析し、国内外のステークホルダーに向けてそれぞれの特性に応じた情報発信を行うことで、奈良先端大のブランド化を進めます。

VISION
04

大学運営体制の高度化による
共創環境の整備



NO.	目標	戦略
13	学内資源の有効活用と配分の全学的なマネジメント	奈良先端大の人的資源、資金、施設・設備など多様な資源を可視化し、全学で計画的かつ柔軟に配分、活用することで、大学としての機能強化を効率的・効果的に進めます。
14	財源の多元化による財務基盤の安定化と教育研究環境整備への積極的な投資	積極的な競争的資金の獲得に加え、産業界や社会との連携を推進することで財源を多元化するとともに、資金獲得力の基盤となる教育研究環境の整備に積極的に投資することで、財務体質強化の好循環を生み出します。
15	大学・社会への多様な貢献を考慮した人事評価と人材育成	大学や社会への貢献を多面的に評価する仕組みをつくることで、教職員それぞれが自らの強みを活かして活躍する意欲を高め、構成員と奈良先端大が共に成長する環境を創り出します。
16	デジタルキャンパスの推進による大学機能の効率化と強靱化	奈良先端大の教育・研究・運営業務のデジタル化を推進するためのマスタープランを策定してサイバー環境を整備することで、大学機能を効率化、強靱化し、物理的な条件に限定されない次世代の大学像を創出します。



DECLARATION OF CO-CREATION COMMUNITY



共創コミュニティ宣言

奈良先端科学技術大学院大学は、多様なアイデンティティや多彩なバックグラウンドをもつ学生や教職員が集うコミュニティです。本学が科学技術の進歩と社会の発展に寄与し、さらに前進を続けるためには、このコミュニティに属するすべての構成員が、安心して学び、働き、能力を発揮できる環境を作り出し、維持することが必要です。

本学が目指す「共創コミュニティ」とは、私たち構成員の各自が互いの多様性を認識し、相互の理解と尊重に努めるとともに、差別を認めず、相手に対する敬意と思いやりの下での意見交換をお互いに、新たな価値の創造を目指す共同体です。本学で共創コミュニティを育むために、私たちは右記のとおり宣言します。

01



本学は、さまざまな人種、民族、国籍、性別、性自認、性的指向、年齢、立場、心身の状態、宗教や信条、文化、経済状況、家族形態等をもつ構成員によって成り立っています。私たちは、想像力とコミュニケーションにより、多様性の理解に努めるとともに、多様性がもたらす豊かなキャンパス環境を大切にします。

02



私たちは、一人ひとりの人権、人格及び個性を尊重します。それぞれが自己実現できる環境づくりのために、私たちは自分の立場に責任を持って、公正かつ公平なコミュニティの維持に努めます。

03



私たちは、構成員の様々な考え方や経験が、多角的な視点や多彩な発想の源になることを確信します。課題やアイデアを共有し、常に相互に敬意を持って議論し、協働することを、新たな価値を共創する推進力とします。

2022年4月1日 制定

情報科学領域 DIVISION OF INFORMATION SCIENCE

ヒューマンAIインタラクション研究室



サクティ サクリアニ ワティアスリ教授
PROF. SAKTI SAKRIANI WATIASRI

Apr 2024 - Now
Full Professor, Human-AI Interaction Labs, NAIST, JAPAN

Oct 2021 - Mar 2024
Associate Professor, School of Information Science, JAIST, JAPAN

Jan 2018 - Sep 2021
Research Associate Professor, Augmented Human Communication Labs, NAIST, JAPAN

Jan 2018 - Sep 2021
Research Scientist, RIKEN Center for Advanced Intelligent Project (AIP), JAPAN

Jun 2011 - Dec 2017
Assistant Professor, Augmented Human Communication Labs, NAIST, JAPAN

Apr 2006 - May 2011
Expert Researcher, Spoken Language Communication Research Groups, NICT, JAPAN

Apr 2003 - Mar 2009
Researcher, Spoken Language Communication Research Labs, ATR, JAPAN



研究内容 RESEARCH CONTENTS

Our research aims to advance human-AI communication and collaboration by exploring interactions across speech, text, and image, as well as language and paralinguistics. Using deep learning, we focus on:

- 1. Multisensory Communicative AI:** Developing technologies for natural, multilingual, and multimodal communication, such as ASR, TTS, and machine speech chains, with capabilities for linguistic code-switching, emotional nuances, and real-time conversational adaptation.
- 2. Spatially Integrated Language AI:** Enhancing real-time language understanding and simultaneous speech translation with geospatial context, allowing AI systems to interpret and respond to linguistic and location-based cues.
- 3. Interactive AI:** Creating immersive interactions through avatars, tele-existence systems, and VR/AR integration, fostering seamless human-machine engagement.
- 4. Representation Learning & Developmental AI:** Emulating human learning with zero-resource, unsupervised learning, self-improvement, and multilingual modeling, supporting AI adaptability across diverse languages and environments.



NAISTで 研究する魅力

THE CHARM OF RESEARCH AT NAIST

01 Pioneering Opportunities & Innovative Freedom

NAIST provides a unique environment where students can lead pioneering research and explore their ideas freely, supported by cutting-edge technology and mentorship.

02 Empowering Growth & Transformative Experience

NAIST fosters both professional and personal growth, offering a transformative journey through hands-on projects, skill development, and guidance from top researchers.

03 Global Impact & International Collaboration

With a robust network of global partners, NAIST enables students to collaborate internationally, making meaningful contributions that resonate worldwide.

今後の展望 FUTURE PROSPECTS

The Human-AI Interaction Laboratory envisions pioneering Human-AI Collaborative Intelligence, where AI not only learns from humans but elevates human potential. Guided by the vision of Society 5.0, we aim to create transformative technologies that harmonize human and AI interactions. By pushing the frontiers of collaboration, we're dedicated to shaping a future where AI drives impactful change for society.



バイオサイエンス領域

DIVISION OF BIOLOGICAL SCIENCE

微生物インタラクション研究室



渡辺 大輔准教授

ASSOC.PROF. DAISUKE WATANABE

- 2021年12月- 奈良先端科学技術大学院大学, 先端科学技術研究科, 准教授
- 2019年6月- 京都大学大学院, 農学研究科 食品生物科学専攻, 准教授
- 2013年9月- 奈良先端科学技術大学院大学, バイオサイエンス研究科, 助教
- 2008年7月- 独立行政法人酒類総合研究所, 研究員
- 2007年7月- 国税庁, 在外研究員 (米国, コーネル大学)
- 2004年4月- 国税庁, 財務技官



研究内容

RESEARCH CONTENTS

当研究室では、人間の生活に身近な発酵食品を生み出す微生物の働きに焦点を当てた研究を行っています。たとえば、パン生地をふくらませたりお酒のアルコールを生成したりする酵母(イースト)という微生物がよく知られています。私たちは、高い発酵力を誇る日本酒専用の酵母に関する研究を通じて、発酵力を決定づける鍵となる遺伝子を解明することに成功しました。この遺伝子の働きを変化させることで、酵母の「やる気」を自在にコントロールし、発酵・醸造産業のさらなる

発展に貢献することも可能となります。また、私たちは発酵過程における様々な環境要因についても研究を進めており、特定の乳酸菌が酵母の発酵力に影響を与えることを発見しました。発酵食品の中では酵母や乳酸菌などが複雑な微生物生態系を形成しており、その中で微生物同士だけが分かり合える選択的なコミュニケーションが行われることを示唆しています。このように、人間の目には見えないミクロの世界での微生物のふるまいや相互作用には、いまだに多くの謎が残されています。私たちは、発



酵食品を単なる食材や製品としてではなく、微生物たちによって構成される「社会」として捉え、このシステムがどのように構築され、機能しているのかを探求しています。現在は、特に微生物の本来の性質が潜んでいると考えられる昔ながらの製法や発酵技術に着目しており、かつて古の都であった奈良に残る伝統的な発酵食品に注目した独創性の高い研究にも挑んでいます。



NAISTで研究する魅力

THE CHARM OF RESEARCH AT NAIST

01 先進性

学内には最新の設備や研究施設が整っているため、いつでも気軽に最先端の技術を用いた実験や解析に取り組むことができ、充実した研究活動を行う機会に恵まれています。

02 学際性

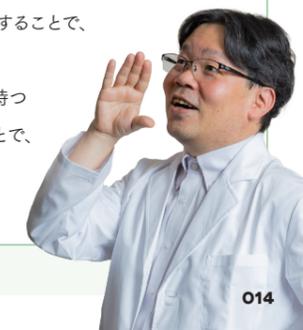
バイオサイエンスに加え、情報科学や物質創成科学といった異なる領域の専門家を身近に感じる環境で研究することで、学問の枠を超えた視点を得ることができます。

03 国際性

国際的な共同研究や交流が盛んで留学生比率も高いため、外国語が飛び交うことが日常茶飯事です。日本にいながら海外留学の雰囲気を楽しむことができます。

今後の展望 FUTURE PROSPECTS

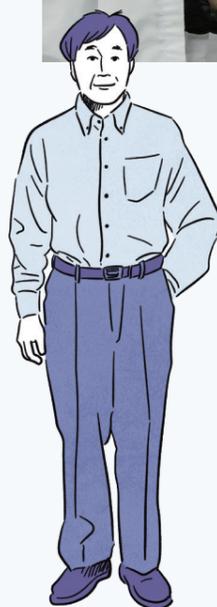
発酵食品のおいしさや健康機能性は国内外で大きな注目を集めており、その需要は高まっています。私たちの目標は、微生物学に基づく発酵食品のさらなる進化です。微生物の働きを深く理解することで、発酵食品の歴史的・文化的価値を保ちながら生産安定性を向上させることができます。さらに、微生物育種技術や最新のフードテックを駆使して、より高品質で新たな付加価値を持つ発酵食品の創出も可能となります。発酵食品とそこに暮らす微生物たちへの理解を深めることで、持続可能な食文化の構築に貢献し、次世代に向けた食の未来を切り拓いていきます。



物質創成科学領域

DIVISION OF MATERIALS SCIENCE

機能超分子化学研究室



廣田 俊教授

PROF. SYUN HIROTA

- 2024年4月 - 現在 奈良先端科学技術大学院大学, 先端科学技術研究科長
- 2023年4月 - 現在 奈良先端科学技術大学院大学, 先端科学技術研究科, 物質創成科学領域長
- 2018年4月 - 現在 奈良先端科学技術大学院大学, 先端科学技術研究科, 教授
- 2007年4月 - 2018年3月 奈良先端科学技術大学院大学, 物質創成科学研究科, 教授
- 2002年10月 - 2007年3月 京都薬科大学, 薬学部, 助教授
- 1996年4月 - 2002年9月 名古屋大学, 大学院理学研究科 物質理学専攻, 助手
- 1995年10月 - 1996年3月 米国, エモリー大学, 化学科, 博士研究員
- 1994年4月 - 1996年3月 独立行政法人日本学術振興会, 特別研究員



研究内容

RESEARCH CONTENTS

様々な生命現象で主要な役割を果たすタンパク質は、それぞれ固有の立体構造を保ちながら機能しています。さらに、複数のタンパク質分子が会合して巨大な超分子になると、新たに高度な機能が加わります。一方で、タンパク質が構造変性して会合し、機能を失ってしまえば、難病の原因になることもあります。我々は、こうしたタンパク質の会合様式を調べ、機能が発揮しやすいように分子が会合した構造を、時にはコンピューターを利用して、独自の視点から設計し、大腸菌を用いて人工的につくる研究を行っています。この研究では、様々な形のタンパク質分子(単量体)をパズルのピース(小片)のようにはめ込み、組み合わせて連結し、新たな機能を持たせます。

現在、我々は、抗体分子の構造と機能の研究に力を入れています。抗体は特定の抗原のみを認識するため、医薬品としての利用が注目を浴びています。しかし、抗体は立体構造が不安定で凝集し易く、沈殿し易いです。その凝集構造は不明な点が多いですが、より安定な抗体医薬品の創



成を目指し、抗体の凝集メカニズムを解明する研究を行っています。また、今年2024年のノーベル化学賞で広く知られるようになりましたが、コンピューターによりタンパク質の立体構造を予測することが可能になり、これまでにない新しい立体構造のタンパク質も設計できるようになってきています。我々は、コンピューターを利用して、人工抗体分子を設計し、新しい抗体医薬品の開発を行っています。



NAISTで研究する魅力

THE CHARM OF RESEARCH AT NAIST

① 他分野学生

学生は、他大学の学部から本学の博士前期課程に進学するため、新しいことに積極的です。

② 他分野教員

物質創成科学領域には、物理、デバイス、化学、バイオマテリアルズ、データサイエンスなどの分野の研究があります。また、1研究科に統合され、バイオサイエンス領域や情報科学領域の教員との交流が盛んです。そのため、他分野の教員と共同研究を行いやすいです。

③ 研究スペース

1研究室のスペースが広く、恵まれた環境で研究できます。

今後の展望 FUTURE PROSPECTS

現在、科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業(CREST)にて「3Dドメインスワッピングを利用したタンパク質の自在配列と機能化」の研究課題を行っています。3Dドメインスワッピングは、同じタンパク質の異なる分子同士で同じ構造領域を3次元的に交換する現象です。今後は、3Dドメインスワッピングを利用して、サイズと構造が均一なタンパク質を自在に集積し、革新的な創薬、機能材料の創製など新たな展開を目指していきたいです。



MESSAGE

保健管理センターからのおたより

学生及び教職員の身体的、精神的健康の保持・増進を図ることを目的として設置された保健管理センターには、気軽に相談できるオアシスとして、日々多くの学生・教職員が訪れています。



所長 種池 学
DIRECTOR. TANEIKE MANABU



看護師 西山 奈帆
NURSE. NISHIYAMA NAO



看護師 西山 絹代
NURSE. NISHIYAMA KINUYO



2024年から体制を新たに さらに学生・教職員に寄り添った保健管理センターへ

保健管理センターの役割は本学学生・教職員の心身の健康を維持することです。そのために、チェック(check)機能として健康診断・日常診療を行い、ケア(care)機能として生活指導・健康教育を充実させ、これらを相乗させることにより健康増進(health promotion)を目指してきました。その結果、設立以来多くの学生や教職員に利用され、2023年度は延べ約5000人の来室者があり、誰でも気軽に利用できる施設として広く学内で認知していただいているように思います。

毎年実施している健康診断については、個別の受診時間指定や各検査の事前受診希望アンケートなどの工夫をおこない、受診率の向上を目指してきました。その結果2023年度も95%以上の高い受診率を維持できました。今後さらに受診率が向上し、100%になることを目標に、すべての構成員がご自身の健康に積極的に関心を持っていただくために、我々がどのようなお手伝いができるか考え、活動していきます。

メンタルヘルスの面では、随時相談を受け付けるとともに、「なんでも相談」「ハラスメント相談」の窓口も併設しています。また、昨今の相談内容の多様化、留学生の増加に伴う人間関係や生活面での問題に対応するた

め、カウンセラーや英語対応可能なスタッフを配置しました。このように、いろいろな側面から学生・教職員の個別相談に応じられるよう、また必要に応じて各部署へのスムーズな連携がとれるよう体制を整えてきた結果、「まずは保健管理センターに相談してみよう!!」という雰囲気が根付いてきているように感じます。

近年増加傾向にある障害学生への受け入れについては、教育支援課と協力し、学生が安心して学べる環境作りを目指し取り組んできました。引き続き、公的サポートの情報収集のお手伝いも含め、より一層ニーズに合わせた支援を提供し、学生一人一人が満足して就学していただけるよう努めます。

本学の創立以来、当センターが人や設備などあらゆる面において充実した環境で活動できるのは、関係者各位のご理解とご協力のおかげであり、心より御礼申し上げます。皆様の期待に応えるべくスタッフ一同全力で業務に取り組んでまいりますので、引き続きご指導・ご支援賜りますよう、何卒宜しくお願いいたします。

業務内容

基本的に保健管理センターの業務は検査や治療を目的としていないため、診療所や病院ほどの機能を有していません。ただし、軽い疾病や病状に対しては応急処置、初期治療をおこないます。当センターで処置、治療が出来ない疾病、病態については病院や専門医への橋渡しをいたします。

定期業務として、年2回の定期・特殊健康診断、健康診断再検査、採用時・海外渡航前後の健康診断、必要に応じた個別の健康診断および指導、ストレスチェックで高ストレスと判定された希望者に対する産業医

面談、実験者に対するの安全教育、新入生へのメンタル・フィジカルヘルス講習などをおこなっています。

相談業務としては、なんでも相談員・ハラスメント相談員を兼務していることで、実質的な問題解決を目指すと同時に、メンタル面でのサポートのために専門のカウンセラーを配置し、心身の状態を総合的に判断、対応できるようにしています。

最近の保健管理センター

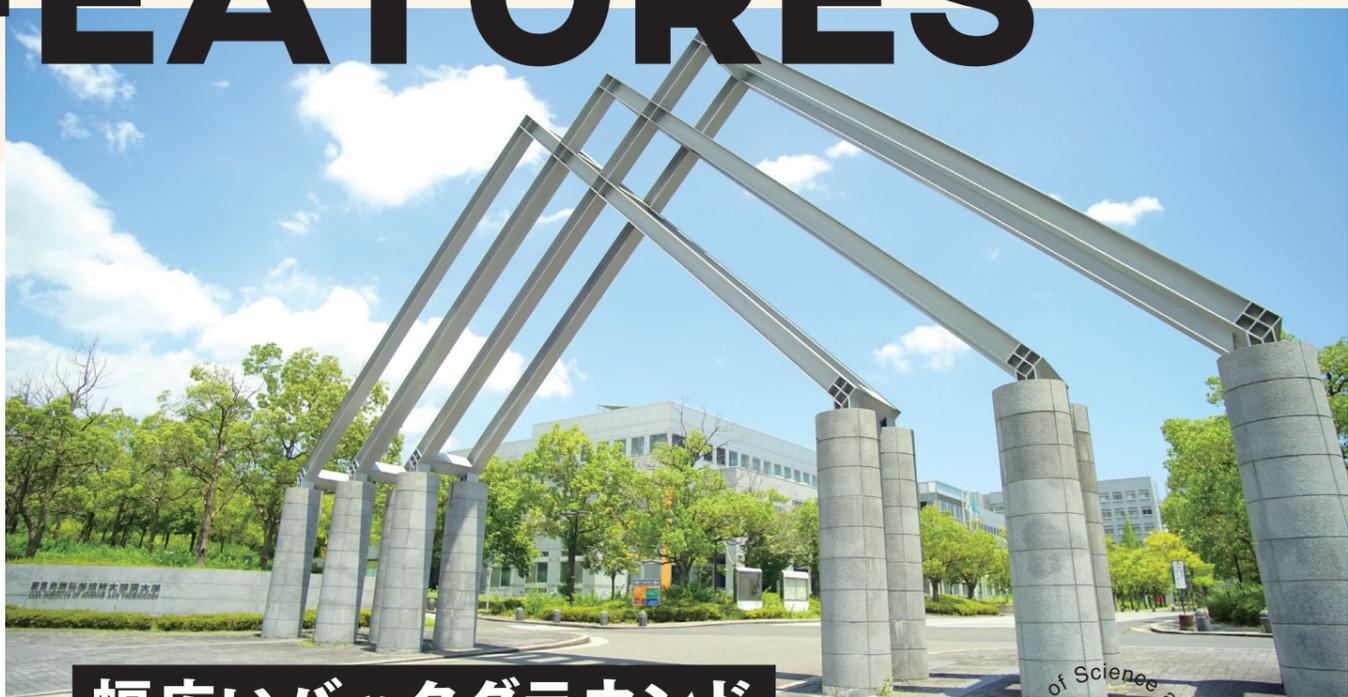
2023年に新しい看護師が、2024年に新しいセンター所長が着任しました。まずは、お世話になっている近隣病院やクリニックへ直に協力継続依頼に伺いました。外国人を含む本学構成員の受け入れをあらためてお願いしたところ、混雑時でも予約を受け入れてくださるクリニックが増えたのは大変有難いことだと感じています。

また、時代のニーズとともに新たな情報発信の取り組みとして、保健管理センターの活動や健康に関する情報をより多くの方に知っていただくために、インスタグラム(@naist_healthcarecenter)や食堂に設置しているサイネージを活用し、情報の発信を行っています。



FEATURES

NAISTの特色



幅広いバックグラウンド

VARIOUS BACKGROUND

学部を持たない大学院大学であり、これからの社会、これからの地球が必要とする科学技術研究と人材育成が行われている本学には、海外からも多くの留学生や研究者が集まり、国際的なキャンパスコミュニティを作り上げています。現在ではおよそ4人に1人が留学生で、多様な出身国や文化的背景を持つ学生及び教職員が共に学び・研究する本学はまさにグローバルキャンパスです。また、海外の教育研究機関との教育研究連携ネットワークを構築し、国際的な頭脳循環のハブとなることを目指しています。多様な構成員の多彩な視点、アイデア、アプローチが織りなす共創が、世界にインパクトを与える新しい価値を生み出すことを促進しています。



研究力の強化

STRENGTHEN OUR RESEARCH

奈良先端大では、科学技術分野の急速な進展に対応し、常に最先端研究とそこでの大学院教育を追求しています。自ら新たな課題に挑戦し飛躍を遂げようとする人が集うとともに、それを可能にし、常に成果を挙げられる環境があります。また複雑化する社会課題に立ち向かうためには、単一の知ではなく総合知による解決が求められており、本学の持つ「多様性」を活かしながら、分野融合型の教育と研究を推進しています。最先端科学技術分野で、研究と人材育成のグローバル化を図り、世界をリードする新たな研究領域の開拓等の改革を推し進め、世界に存在感のある研究大学院大学を目指します。



世界に広がるネットワーク

WORLDWIDE NETWORK

奈良先端大の研究の高度化及びグローバル化を推進するため、海外の研究機関等と協力し、国際共同研究室や連携研究室を海外の研究機関及び本学内に設置しています。

本学の学術交流協定校は、世界25か国96機関に及び、そのうち博士後期課程において7大学、博士前期課程において1大学との間でダブルディグリープログラムを実施しています。(2024年4月1日現在)

また、アジア地域における教育研究連携の拠点としてインドネシアとタイに海外オフィスを設置しています。本学留学生の修了生は年々増加しており、インドネシアでは2013年に本学最初の留学生同窓会組織であるインドネシアNAIST同窓会が発足し、タイでも2024年にタイNAIST同窓会が設立されるなど、そのネットワークは広がりを見せています。



世界で活躍する修了生

ACTIVE ALUMNI ALL OVER THE WORLD

これまでに博士前期課程(修士)修了者9,724名、博士後期課程(博士)修了者(論文提出による博士学位の取得者を含む)2,086名を社会の様々な分野で研究者・技術者等として社会に送り出しています。(2024年3月31日現在)

教員一人当たりの論文数や研究費などの研究力指標でトップクラスの本学で学んだ、一万を超える修士・博士は、研究者や教員としてだけでなく、多くの企業を含む国内外の多様な場で活躍しています。

日本経済新聞社が企業人事担当者を対象に過去2年間採用した各大学の学生のイメージを調査した「就職力」ランキング※において、奈良先端大の学生は「行動力」で全国1位を獲得し、本学で培われた力は就職先でも高く評価されており、その活躍ぶりが窺えます。

※出典:日経キャリアマガジン特別編集 価値ある大学2022-2023 就職力ランキング(2022年6月発行)



新しい研究環境

NEW ENVIRONMENT FOR RESEARCH

トップクラスの研究力を誇る本学において、研究に没頭できる研究環境を整備していることは最も大きな魅力の一つです。近年では、より充実した研究環境づくりのため、様々なセンターを設置しています。2023年には、新たに生命科学基礎センターを設置し、機器・施設の整備や最先端技術の導入を通して、生命科学及び融合領域研究の発展、深化、効率化に貢献し研究支援を行っています。2024年にも、先端の光技術と、奈良先端大が注力してきたAI・バイオ・工学技術を融合し、医療(Medi)を光らせる医工連携研究を推進するメディルクス(Medilux)研究センターを新たに設置し、光技術を中軸とする診断・治療・健康に関連する研究と教育を行っています。



VARIOUS BACKGROUND

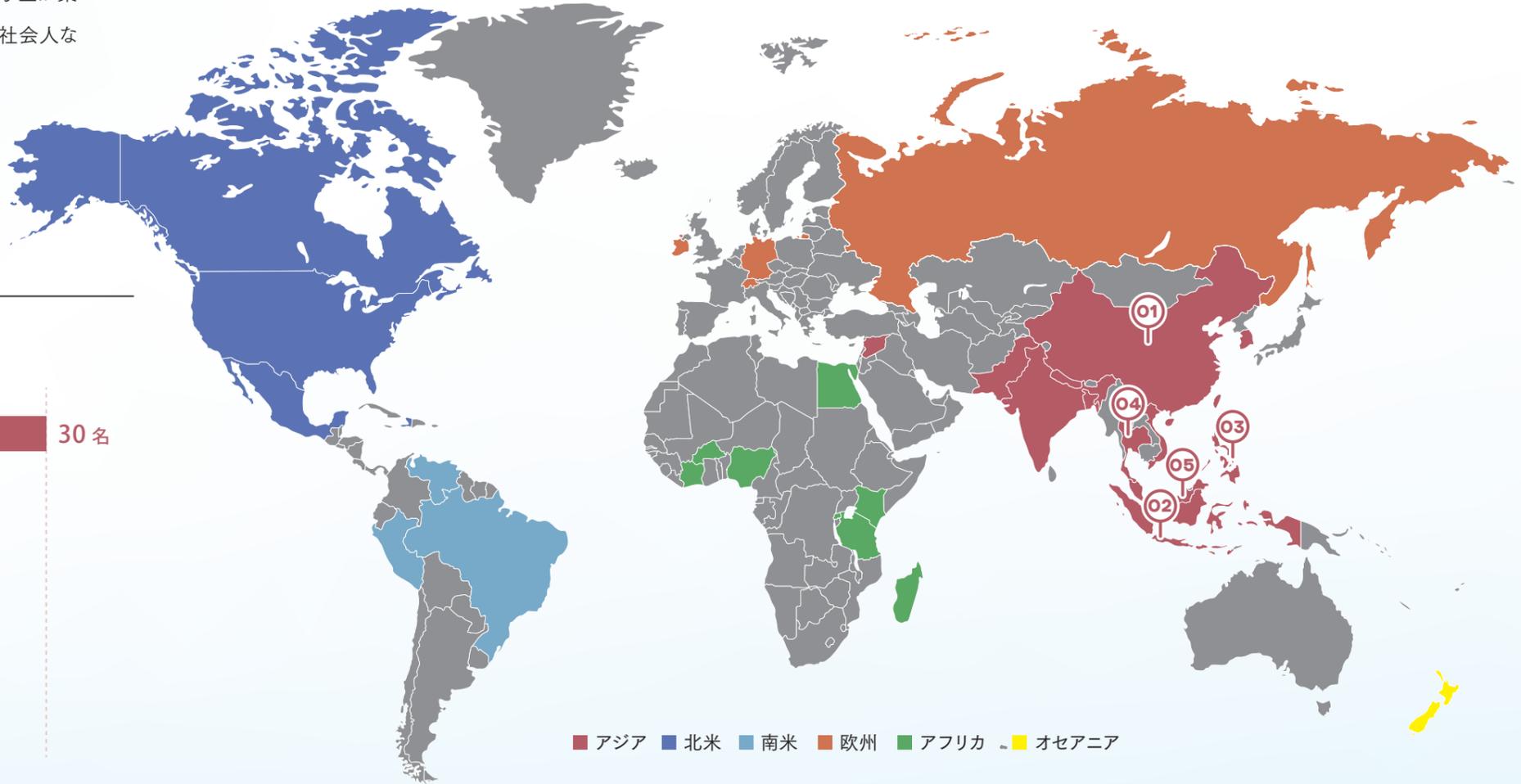
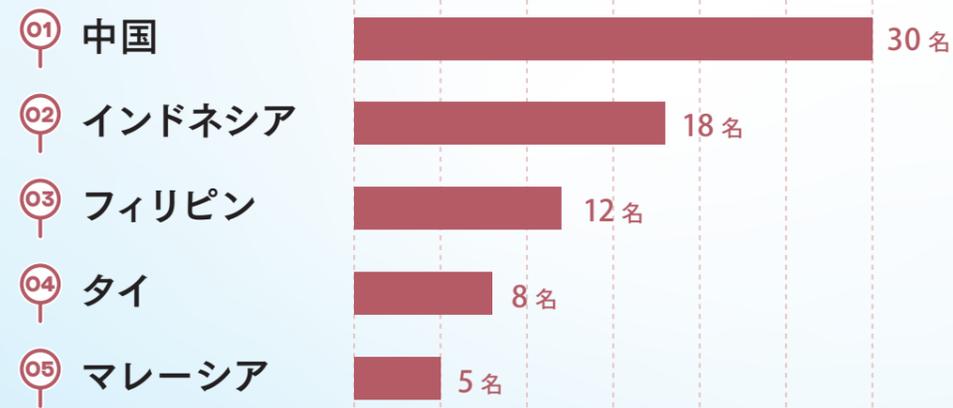
幅広いバックグラウンド

本学は学部をもたない独立した大学院大学であるため、国内外問わず、多様な学生が集まります。出身者の経歴は多種多様であり、他大学の卒業生、高専出身者や社会人など異なるバックグラウンドを持つ学生が本学で研究を行っています。

2024年入学者 出身国内訳

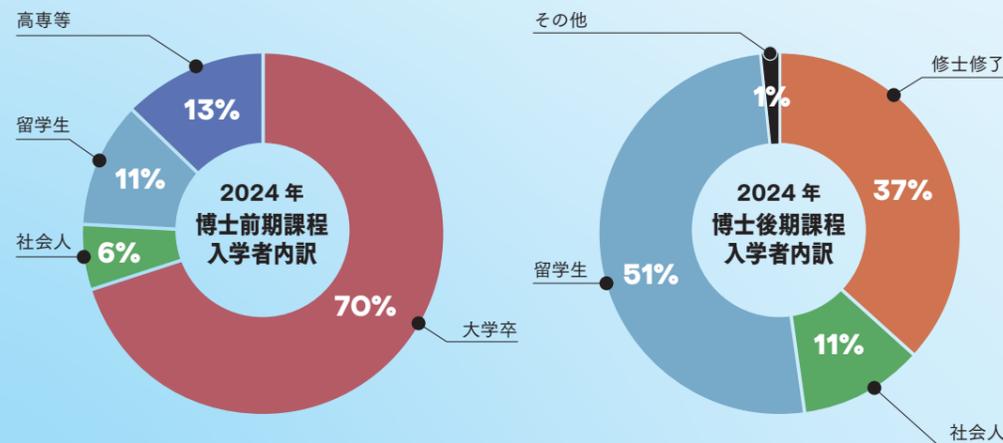
BREAKDOWN OF ENROLLED STUDENTS' HOME COUNTRY IN 2024

\\ 出身国 TOP5 //



2024年 入学者内訳

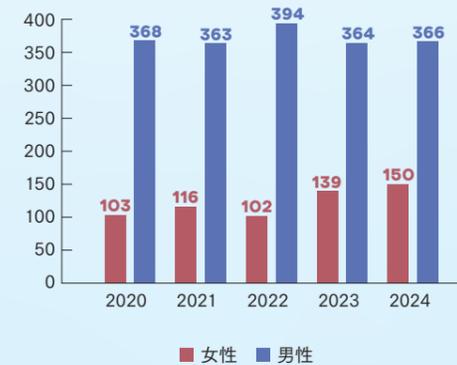
BREAKDOWN OF ENROLLED STUDENTS IN 2024



2024年入学者 男女比

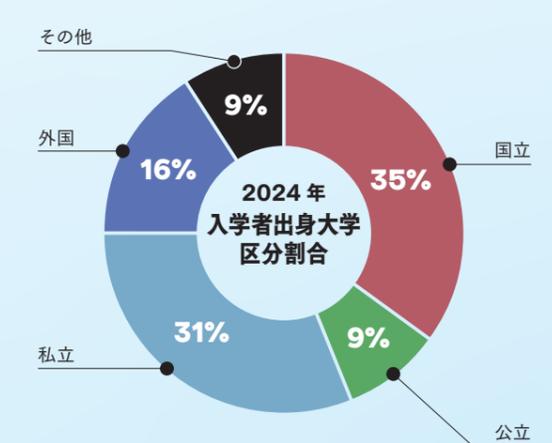
THE MALE/FEMALE RATIO

本学では、近年多くの女子大学と協定を締結していることもあり、女子学生の数が増加傾向にあります。



2024年入学者 出身大学区分割合

UNIVERSITY CATEGORY





学術交流協定締結状況

25地域96件(2024年4月1日時点)

No.	地域	国・地域名	協定種類(領域)	相手先機関名	相手先機関名(協定書記載名)	
1	アジア	大韓民国	2	大学間	国立ハンパク大学校	Hanbat National University
2			研究科間(情報)	慶北大学校 ITエンジニアリング学部	College of IT Engineering, Kyungpook National University	
3		中国	8	大学間	中国科学院 遺伝学発生生物学研究所	Institute of Genetics and Developmental Biology, Chinese Academy of Sciences
4			大学間	天津理工大学	Tianjin University of Technology	
5			研究科間(物質)	南京大学 化学工程院	School of Chemistry and Chemical Engineering, Nanjing University	
6			大学間	遼寧大学	Liaoning University	
7			大学間	東北師範大学	Northeast Normal University	
8			研究科間(情報)	雲南大学情報工学部	School of Information Science and Engineering, Yunnan University	
9			研究科間(バイオ)	南京農業大学 生命科学研究所	College of Life Sciences, Nanjing Agricultural University	
10			研究科間(バイオ)	南京大学 生命科学研究所	School of Life Sciences, Nanjing University	
11		台湾	4	大学間	国立陽明交通大学(旧 国立交通大学)	National Yang Ming Chiao Tung University(National Chiao Tung University)
12			研究科間(物質)	国立陽明大学生医光電研究所(国立陽明交通大学に名称変更)	Institute of Biophotonics, National Yang-Ming University (National Yang Ming Chiao Tung University)	
13			大学間	国立台湾科技大学	The National Taiwan University of Science and Technology	
14			大学間	国立成功大学	National Cheng Kung University	
15		ベトナム	8	研究科間(バイオ)	ベトナム科学技術院 バイオテクノロジー研究所	Institute of Biotechnology, Vietnam Academy of Science and Technology(VAST)
16			研究科間(物質)	ベトナム科学技術院 物質科学研究所	Institute of Materials Science, Vietnam Academy of Science and Technology(VAST)	
17			大学間	ベトナム国家大学 ハノイ自然科学大学	Hanoi University of Science, Vietnam National University(VNU)	
18			大学間	ベトナム国家大学 ハノイ工業技術大学	University of Engineering and Technology, Vietnam National University(VNU)	
19			研究科間(情報)	ベトナム国家大学ホーチミン市科学大学電子通信学部	Faculty of Electronics and Telecommunications, Ho Chi Minh City University of Science, Vietnam National University(VNU)	
20			大学間	ベトナム国家大学ホーチミン市校情報工学大学	Vietnam National University Ho Chi Minh City, University of Information Technology	
21			研究科間(情報)	国立ダナン大学科学技術大学電子通信学部	Department of Electronic and Telecommunication Engineering, University of Science and Technology - The University of Danang, Vietnam	
22			大学間	フエ科学大学	Hue University of Sciences	
23		タイ	5	大学間	マヒドン大学	Mahidol University
24			大学間	チュラロンコン大学	Chulalongkorn University	
25			大学間	カセサート大学	Kasetsart University	
26			大学間	チェンマイ大学	Chiang Mai University	
27			大学間	モンクット王工科大学トンブリ校	King Mongkut's University of Technology Thonburi	
28		マレーシア	5	大学間	マレーシアサイエンス大学	Universiti Sains Malaysia
29			大学間	マラヤ大学	University of Malaya	
30			大学間	マレーシア工科大学	Universiti Teknologi Malaysia	
31			大学間	トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学	Universiti Tunku Abdul Rahman	
32			大学間	マレーシア国民大学	Universiti Kebangsaan Malaysia	
33		フィリピン	2	大学間	アテネオデマニラ大学	Ateneo de Manila University
34			大学間	フィリピン大学 デリマン校	University of the Philippines Diliman	
35		インドネシア	8	大学間	ガジャマダ大学	Universitas Gadjah Mada
36			大学間	IPB大学(旧名称:ポゴール農科大学)	IPB Univercity (Bogor Agricultural University)	
37			大学間	インドネシア大学	Universitas Indonesia	
38			大学間	ハサヌディン大学	Univetsitas Hasanuddin	
39			大学間	バンドン工科大学	Institut Teknologi Bandung	
40			大学間	ジェンダル・ソーデルマン大学	Universitas Jenderal Soedirman	
41			大学間	スラバヤ電子工学ポリテクニク	Electronic Engineering Polytechnic Institute of Surabaya (Politeknik Elektronika Negeri Surabaya(PENS))	
42			大学間	セプルフノベンベル工科大学	Faculty of Industrial Technology, Sepuluh Nopember Institute of Technology	
43		インド	4	研究科間(物質)	インド自然科学教育研究大学—トリバンダム校	Indian Institute of Science Education and Research, Thiruvananthapuram
44			大学間	KIITエンジニアリング・カレッジ	KIIT College of Engineering	
45			大学間	インド工科大学ジョードプル校	Indian Institute of Technology Jodhpur	
46			大学間	インディラ・ガンディ・デリー女子工科大学	Indira Gandhi Delhi Technical University for Women(IGTUW)	
47		バングラデシュ	2	大学間	バングラデシュ工科大学	Bangladesh University of Engineering and Technology
48			研究科間(バイオ)	ノース・サウス大学 ヘルス・ライフサイエンス研究科	School of Health and Life Sciences, North South University	

No.	地域	国・地域名	協定種類(領域)	相手先機関名	相手先機関名(協定書記載名)		
49	ヨーロッパ	イギリス	2	大学間	エディンバラ大学	University of Edinburgh	
50			研究科間(情報)	ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン数理科学研究科	Department of Statistical Science, University College London		
51		オランダ	2	研究科間(物質)	ライデン大学 理学部	Faculty of Science, Leiden University	
52			研究科間(物質)	デルフト工科大学・電子数理情報工学部	Faculty of Electrical Engineering, Mathematics and Computer Science, Delft University of Technology		
53		フランス	13	大学間	ポールサバティエ大学	Université Toulouse III - Paul Sabatier	
54			大学間	エコールポリテクニク	Ecole Polytechnique		
55			大学間	エコールノルマル・シュペリウール・パリサクレール校	Ecole Normale Supérieure Paris-Saclay		
56			研究科間(情報)	テレコムスードパリ国立電気通信大学院大学	Telecom SudParis		
57			研究科間(情報)	パリ電子工学技術高等学院	École Supérieure d'Ingénieurs en Électrotechnique et Electronique (ESIEE) Paris		
58			研究科間(情報)	カーン国立工学技術高等学院	École nationale supérieure d'ingénieurs de Caen (ENSICAEN)		
59			大学間	テレコムパリ(旧名称:テレコムパリテック)(フランス国立高等通信大学)	Telecom Paris (Telecom ParisTech)		
60			大学間	ソルボンヌ大学	Sorbonne Université		
61			大学間	パリサクレール大学	Université Paris-Saclay		
62			大学間	レンヌ大学	University of Rennes		
63			大学間	リヨン高等師範学校	Ecole Normale Supérieure de Lyon (ENS de Lyon)		
64		大学間	ピカルディ・ジュール・ヴェルヌ大学	Université de Picardie Jules Verne			
65		大学間	ブルゴーニュ・フランシュ・コンテ大学	Université Bourgogne Franche-Comté (UBFC)			
66		ドイツ	11	研究科間(物質)	ラインマイン応用科学大学 工学部	Faculty of Engineering, RheinMain University of Applied Sciences	
67			大学間	アーヘン工科大学	RWTH Aachen University		
68			大学間	ユストゥス・リービヒ大学ギーゼン	Justus Liebig University Giessen		
69			大学間	カールスルーエ工科大学	Karlsruhe Institute of Technology		
70			研究科間(情報)	ウルム大学 工学/コンピューターサイエンス学部	Faculty of Engineering and Computer Science, University of ULM		
71			大学間	レーゲンスブルク大学	University of Regensburg		
72			研究科間(情報)	ミュンヘン工科大学 インフォーマティクス学部	Department of Informatics, Technical University of Munich		
73			研究科間(情報)	ミュンヘン工科大学 電気・コンピュータ工学部	Department of Electrical and Computer Engineering, Technical University of Munich		
74			大学間	コーブルク大学	Coburg University of Applied Sciences and Arts		
75			研究科間(情報)	ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフ 数学・自然科学学部	Faculty of Mathematics and Natural Sciences, Heinrich Heine University Düsseldorf		
76			大学間	ドイツ人工知能研究センター (DFKI)	DFKI (The German Research Center for Artificial Intelligence)		
77		イタリア	2	大学間	カリアリ大学	University of Cagliari	
78			大学間	トレント大学	University of Trento		
79		スペイン	1	大学間	グラナダ大学	University of Granada	
80		フィンランド	1	研究科間(情報)	トゥルク大学医学部	Faculty of Medicine, University of Turku	
81		ロシア	1	大学間	サンクトペテルブルク工科大学	The St. Petersburg State Polytechnical University	
82		オーストリア	1	研究科間(物質)	グラーツ工科大学 固体物理学研究所	Institute of Solid State Physics, Graz University of Technology	
83		カナダ	1	研究科間(バイオ)	ブリティッシュコロンビア大学 理学部	Faculty of Science, University of British Columbia	
84		北米	5	研究科間(バイオ)	ミネソタ大学 バイオテクノロジー研究所	Biotechnology Institute, University of Minnesota	
85			大学間	カリフォルニア大学デービス校	University of California Davis		
86			研究科間(物質)	ミシガン大学 工学部	The Regents of the University of Michigan on behalf of its Macromolecular Science & Engineering program		
87			大学間	カリフォルニア大学サンディエゴ校	University of California, San Diego		
88			大学間	ローレンス・バークレー国立研究所 共同ゲノム研究所	Lawrence Berkeley National Laboratory (LBNL), Joint Genome Institute(JGI)		
89		ブラジル	4	大学間	サンパウロ連邦大学	Universidade Federal de São Paulo(UNIFESP)	
90			研究科間(情報)	サンパウロ大学 核エネルギー農業センター	The University of Sao Paulo Center of Nuclear Energy in Agriculture		
91			研究科間(情報)	サンパウロ大学 農学部ルイスデケイロス校	The University of Sao Paulo Higher School of AgricultureLuiz de Queiroz		
92		研究科間(情報)	サンパウロ大学 数学統計研究所	The University of Sao Paulo Institute of Mathematics and Statistics			
93		アフリカ	セネガル	1	大学間	シェイク・アンタ・ジョップ大学	Cheikh Anta Diop University
94		オセアニア	2	大学間	ニューカッスル大学	The University of Newcastle	
95			大学間	アデレード大学	University of Adelaide		
96		ニュージーランド	1	大学間	ユニテック工科大学	Unitec Institute of Technology	



ダブルディグリープログラム

ダブルディグリープログラムは、連携先の大学に同時に学籍を置き、両大学の教員から研究指導を受け、それぞれの大学から学位の認定を受ける制度です。

現在、博士後期課程において7大学、博士前期課程において1大学との間でプログラムを実施しています。



(2024年4月1日時点)

相手先機関名 (協定書記載名)	国・地域	相手先機関 研究分野・部局	本学研究分野
国立陽明交通大学 (National Yang Ming Chiao Tung University)	台湾	① College of Science ② College of Electrical and Computer Engineering ③ College of Engineering	情報科学 バイオサイエンス 物質創成科学
チュロンコン大学 (Chulalongkorn University)	タイ	Faculty of Science・Biochemistry and Molecular Biology	バイオサイエンス
カセサート大学 (Kasetsart University) (博士前期課程)	タイ	Faculty of Engineering	物質創成科学
ポールサバティエ大学 (Université Paul Sabatier)	フランス	All fields with a counterpart in NAISTatier)	情報科学 バイオサイエンス 物質創成科学
パリサクレ大学 (Université Paris-Saclay)	フランス	All fields with a counterpart in NAIST	情報科学 バイオサイエンス 物質創成科学
ソルボンヌ大学 (Sorbonne Université)	フランス	Information Sciences	情報科学
ウルム大学 (Ulm University)	ドイツ	Computer Science and Engineering Science	情報科学
マッコーリー大学 (Macquarie University)	オーストラリア	① Department of Biological Sciences ② Department of Molecular Sciences ③ Department of Chiropractic ④ Department of Computing ⑤ Department of Earth and Planetary Sciences ⑥ School of Engineering ⑦ Department of Environmental Sciences ⑧ Department of Mathematics and Statistics ⑨ Department of Physics and Astronomy	情報科学 バイオサイエンス 物質創成科学



国際共同研究ネットワーク

奈良先端大の研究の高度化及びその展開のグローバル化を推進するために、海外の大学等の研究機関と協力し、海外の研究機関及び本学内に国際共同研究室を設置しています。

本学の海外研究拠点

- カリフォルニア大学デービス校(アメリカ)
- 国立陽明交通大学(台湾)



本学内の国際共同研究室

- エコールポリテクニク(フランス)
- プリティッシュコロンビア大学(カナダ)



海外教育研究連携拠点

アジア地域における教育研究連携の拠点として2か所に海外オフィスを設置し、国際協働事業を推進しています。

- NAISTインドネシアオフィス
(IPB大学(旧名称：ボゴール農科大学)窓会館内)
- NAISTタイオフィス(カセサート大学工学部棟内)



IPB University
— Bogor Indonesia —



インドネシアにおける協働事業の実施

- UGM-NAISTコラボレーションオフィス
(ガジャマダ大学バイオテクノロジー研究センター内)



海外の教育研究機関との連携研究室

奈良先端大の教育研究の一層の拡充及び整備を図るとともに、研究交流の促進を図ることを目的に連携研究室を設置しています。

- ポールサバティエ大学(フランス)



INTERVIEW

SUMIRE
KIRITA



切田 澄礼

PROFILE

2022年4月 NTTコミュニケーションズ 入社
 2022年3月 奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科
 (バイオサイエンス領域) 植物免疫学研究室 修了
 2022年1月 株式会社 GRow 起業、代表取締役就任

01 現職・自営業の業務(取り組み)内容

INTERVIEW

「農業の世代交代をスムーズに起こすこと」を目標に、農業と若者の接点を増やすことを仕事にしています。農業に関心がある若者を増やし、その中から実際に農家になる人、または畑を持ち野菜を育てる人を増やします。そのために、「オンライン」

で気軽に農家さんと繋がった若者が、実際に「現地」に訪問する仕組みを作っています。

農業体験イベントの様子



阪急川西店での販売会



02 本学での学びが現職に活かされていると感じる点

INTERVIEW

私はNAISTに入学した理由が二つあり、一つはやりたい研究があったからなのですが、もう一つはIoT分野におけるグローバルアントレプレナー人材育成プログラムの「GEIOT」を受講したかったからです。GEIOTではIoT分野を活用したビジネスプランの作成・検証を学びました。私はそれまでアントレプレナーシップ育成講座を学んできましたが、IoT分野を活用したものは初でした。

そのため、GEIOTを学んでから私の課題解決のためのアプローチ方法が増え、それまでは「サービス(仕組み)を提供する」のみだったのですが、GEIOTを通じて「IoT技術を生かした新しい製品を開発する」方法を身につけることができました。

実際、GRowのサービスは既存のネットサービスを組み合わせて、新しい仕組みを作っています。この今ある技術から新しいサービスを作る点はGEIOTでの学びを生かしているなと感じております。



農業体験イベントを開催

03 本学で学んだことと現職の繋がり

INTERVIEW

「学んだこと」との繋がりという点ですが、NAISTでできた人脈には今もかなり助けられています。特に、GEIOTでは他領域の教授、外部講師、先輩起業家などの研究室だけでは出会えなかったであろう多くの方々との出会いがありました。その繋がりは今も継続しており、今回のアニュアルレポートのお話でもGEIOTの先生からいただいたもので、本当にありがたい限りです。

また、私は植物免疫学研究室(西條研究室)で土壌微生物について学んでおり、将来は土壌微生物の分野でもビジネスを展開したいと考えております。そして、現在進行形でその分野でのお仕事をいただけそうな兆しが見えておりますので、近い将来、研究室で学んだことが現職に生かしている状態になりそうです。

COMPANY INFO.

会社名 株式会社 GRow

主な事業

- 農家さんと野菜と出会う「ONLINE × FARMERS MARKET」
- 農家さんのおもてなしと、若者の得意を交換し合いこする農業体験『あいっこ』
- 農業体験企画運営、広報事業・出張授業等



会社HP ▶
<https://grow-agri.com/>



農家さんと交流する「農語りBAR」を京都で開催



研究の発展を支える本学独自の制度

若手研究者ネットワーク 開拓ワークショップ

国内外の若手研究者のネットワーク構築、本学における研究活動の展開やリーダーシップを発揮するための活動を目的として2015年度から実施しているものです。本学の若手研究者が、内外から研究者を招聘してワークショップやクロズの場での議論を計画し、その実施のために必要な経費を支援しています。

2023年度は本制度により、2名の若手研究者を支援し、制度開始以降30名の研究者に総額29,786千円の支援を行っています。



社会課題解決型共創プロジェクト (上位科研費チャレンジ支援)

SDGs やカーボンニュートラル等の諸課題に社会科学の視点を取り入れて解決する共創プロジェクトの推進を目指し、若手研究者に対して、科研費の上位研究種目への申請を促進します。

2023年度は8名への支援を実施しました。



研究者のスタートアップを支える取り組み

女性研究者スタートアップ経費

採用後の出産・育児等のライフイベントの影響を受けやすい女性研究者の採用を促進し、また、本学での円滑な研究開始を支援することを目的とした制度です。常勤女性教員に対し、採用日から2年間執行できる経費を200万円支給します。2023年度は4名の女性研究者がこの研究費を受給し、これまでに51名の女性研究者の研究スタートを支えています。



海外研究者スタートアップ経費

海外から来日・帰国した優秀な研究者の採用を促進し、また、本学での円滑な研究開始を支援することを目的とした制度です。国籍要件はなく、常勤教員としての採用が決定した時点で海外の教育・研究機関等に1年以上所属している研究者等に対して、採用日から2年間執行できる経費として200万円を支給します。



未来の研究者を育成するための取り組み

イノベーション創出フェローシップ

次代の科学技術・イノベーションを担う貴重な人材である博士後期課程学生に、研究に専念できるよう生活費相当額の研究専念支援経費(年額180万円)と研究費(年額20万円以上)からなるフェローシップを提供するとともに、組織的なキャリアパス支援を推進する「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」を展開しています。これに加え、対象学生に対して授業料の全額を免除しています。このプログラムに選ばれた学生が素晴らしい研究成果をあげて社会に羽ばたくとともに、後に続く後輩の刺激となることで優秀な人材が博士課程に進学する好循環を生み出し、より多くの博士人材が科学技術・イノベーションの担い手となっていくことを期待しています。



先端科学技術融合分野におけるイノベティブ博士人材 支援プロジェクト

NAIST Touch Stone

情報・バイオ・物質とそれらの融合領域で社会変革を先導し得るイノベティブな博士人材を育成・支援する「次世代研究者挑戦的研究プログラム」を展開しています。本学が推進する「先端科学技術融合分野におけるイノベティブ博士人材支援プロジェクト」(略称: NAIST Touch Stone)は、生活費相当額の研究奨励費(年額約200万円)と研究費(年額40万円以上)による経済的支援を通じて研究に専念できる環境を提供し、本学独自のプログラムである「研究スプリント」(課題解決型研究プロジェクト)や「クロスバイク」(異文化交流指向のキャリア形成ワークショップ)等の特長とするもので、我が国の科学技術・イノベーションを担う高度博士人材の育成を促進しています。

※上記2つの事業は、「先端科学技術融合分野におけるイノベティブ博士人材支援プロジェクト Ver.2(略称: NAIST Granite Program)」として、2024年4月から、一本化した運用を行います。



デジタルグリーンイノベーションセンター

CENTER FOR DIGITAL GREEN-INNOVATION

設置理念

地球規模の深刻な環境・食糧・エネルギー問題を解決し、豊かで持続可能な社会を構築するために、バイオエコノミーの理念の下で、本学が世界に誇るバイオサイエンス研究を基盤に、AIやIoTなどのデジタル情報技術、およびナノセンサーやエコデバイス・マテリアルなどのデジタルI/O技術を融合した次世代デジタルグリーン科学技術を創造し、その成果の社会実装とそれらを担う多様な課題解決に取り組むことができる人材育成に寄与することでSDGsの達成に貢献します。

取り組み

学際分野の創造・先導・発信

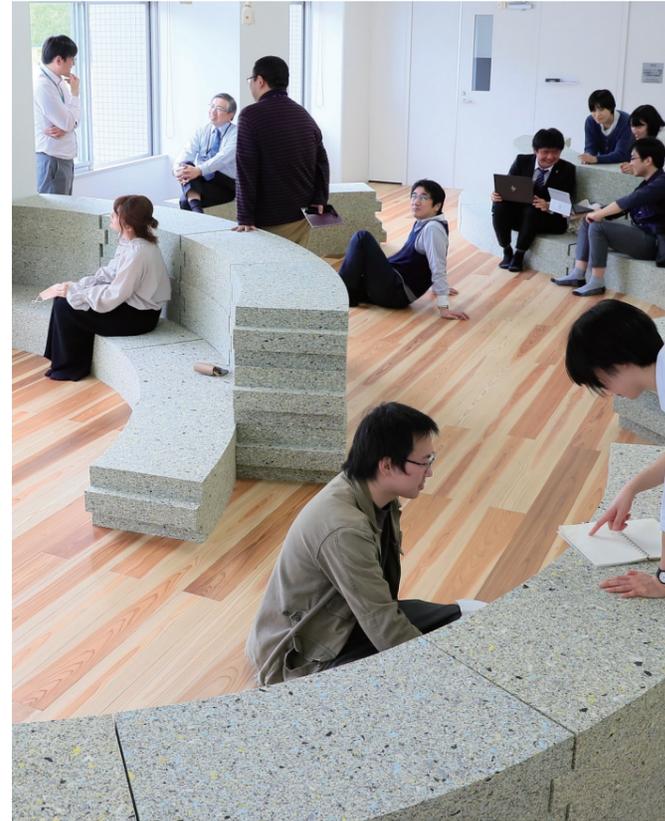
本学の3つの研究分野を融合したデジタルグリーン科学技術を創造・先導し、世界へ発信します。

バイオエコノミーの推進と産学連携

デジタルグリーン科学技術研究に基づくバイオ/グリーンエコノミーを推進し、多種多様な企業との組織的な産学連携を進めることでSDGsに貢献します。

人材育成の強化

環境・食糧・エネルギー問題の解決による持続可能社会の構築やSociety 5.0の実現に貢献する人材を育成します。



データ駆動型サイエンス創造センター

DATA SCIENCE CENTER

設置理念

近年、これまでの仮説駆動型の科学、すなわち研究者が想定した仮定を実験によって検証する形の科学から、さまざまな形で得られた実験データをもとにそれを説明するモデルを見つけ出す、という「データ駆動型」の科学へとアプローチが変わりつつあります。本学ではデータ駆動型サイ

エンスを情報・バイオ・物質及びその融合領域に横断的に展開し、これらの領域における新しい学際融合領域の開拓を行うため、新しく「データ駆動型サイエンス創造センター」を設置して、先端的研究の展開と、社会の要請に応える柔軟な教育を推進していく計画です。

部門紹介

データサイエンス部門

データ駆動型サイエンスの基盤的研究や人工知能(深層学習、推論モデル)を中心にデータ駆動型サイエンスの基礎となる情報理論を開拓します。

マテリアルズ・インフォマティクス部門

データ駆動型的手法を物質創成科学に適用し、プロセスまで含めた新材料の探索や新規機能開発を行います。

国際教育研究連携部門

データ駆動型サイエンスに関する海外拠点の設置や国内外の有力研究機関との連携を強化し、教育研究における国際的連携を推進します。

バイオインフォマティクス部門

分子生物学の発達で急増してきた生物学データの解析にデータサイエンスの手法を適用し、生命現象の統計的な解明とその応用を目指します。

リサーチトランスフォーメーション実装部門

2023年度文部科学省・教育研究組織改革分(組織整備)「リサーチトランスフォーメーション(RX)プラットフォームの構築事業」の採択を受けて設置された部門です。

RXによりデータ駆動型サイエンスの効果の社会実装を行い、研究成果と新産業創出の連結を推進します。現在本センターが中心となり、RXプラットフォーム構築活動を全学的に展開中です。

2024年度からの最新センター

メディルクス研究センター

MEDILUX RESEARCH CENTER

センター概要

本センターでは、本学が注力してきたAI・バイオ・工学技術の連携と融合による医療技術研究の実績を基盤に、先端光技術との融合による新しい医工連携研究を推進します。光のラテン語である“Lux”は光を象徴するとともに、多分野からの英知や社会からの期待を結集する輝きを連想させる、という観点から”医療

を光らせる“という意味を含め、メディルクス(Medi-Lux)研究センターと命名しました。幅広い時空間・波長帯の光(電磁波)を駆使した先端光技術をAI・バイオ技術と融合することにより、医療を光らせる診断・治療・健康技術への展開を目指します。



マテリアル研究プラットフォームセンター・ 生命科学研究基盤センターのキックオフシンポジウム

2023年11月14日(火曜日)に奈良公園バスターミナル/レクチャーホールにて、マテリアル研究プラットフォームセンターと生命科学研究基盤センターのキックオフシンポジウムが開催されました。今後、両センターは、設備の共用化や学外連携を推進し、先端研究プラットフォームとして、また人材育成機関としての役割を担います。



マテリアル研究プラットフォームセンター (CMP)

CENTER FOR MATERIAL RESEARCH PLATFORM

センター概要

本センターは、物質科学研究とそのデジタル化にかかる先端的学識や技術を集積し、研究教育環境の基盤となる先端研究プラットフォームとして、本学における物質材料科学にかかる研究力強化の支援を目的で、前身の物質科学教育研究センターを改組して設立されました。

物質科学に関する先端研究の実績を基盤に、データ駆動型サイエンス創造センターやデジタルグリーンイノベーションセンターなどの学内組織と協調して、自動化や遠隔化に対応したスマート材料合成やデータマインニング技術を機能的に実装したデジタル化技術を取り込み、世界を先導するマテリアルイノベーションの創出を支援いたします。

取り組み内容

- 本センターは物質科学研究において、デジタル化・リモート化の推進、研究設備の充実、学内外の機関との連携に取り組み、先端的学識や技術の集積拠点すなわちマテリアルプラットフォームの形成を推進しています。センターには3つの部門があり、それぞれDX・RXの推進、設備整備・測定・分析、産学連携や地域活性化に向けた取り組みをしています。
- マテリアルデジタル研究推進部門：研究環境のデジタル化を推進。
 - マテリアルファシリティー共用部門：共用設備の整備と運用。
 - 連携推進部門：学内外の連携を強化し、課題解決を図る。

また、センターでは文部科学省のマテリアル先端リサーチインフラ (ARIM) 事業にも参画しており、全国の25機関と連携し、材料研究の変革を目指してARIM事業を推進しています。学内外の研究者に共用設備を提供し、得られたデータをセンターハブ機関であるNIMSに集積し、研究開発に活用しています。同センターでは、マルチマテリアル化技術や次世代高分子マテリアルに関連するデータ集積に貢献しています。令和5年度には、研究機関、民間企業合わせて52件の申請があり、28設備にて支援を行いました。

機器紹介

1. 多機能走査型X線光電子分光分析装置 (XPS)



物質表面の構成元素の組成分析、化学状態分析、定量分析を非破壊的に分析する装置です。試料に特性X線を照射し、放出された光電子のエネルギーを測定することで、数nm程度の表面の分析が可能です。

2. 多機能分析走査電子顕微鏡 (SEM)



電子線を用いて様々な観察・分析を行うことができる走査電子顕微鏡です。通常の像観察はもちろんのこと、EDS、EBSD、CLと3つの検出器を搭載しており、元素分析から結晶方位、固体の電子状態などの分析も可能です。

生命科学研究基盤センター (LiSCo)

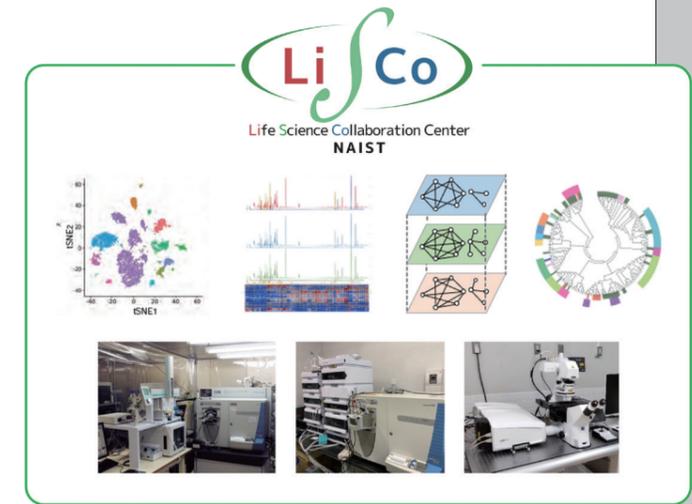
LIFE SCIENCE COLLABORATION CENTER

センター概要

生命科学研究基盤センター (LiSCo) は、生命科学とその融合領域の研究を推進する上で必要な機器・施設の整備や、最先端技術の導入を通して、研究の発展、深化、効率化に貢献することを目指し、2023年1月にスタートしました。本センターでは、生命科学に関する機器・施設の学内外への共用化を進めると同時に研究支援を行うことで、地域・国際・産官学連携や人材育成にも貢献します。

取り組み内容

LiSCoは、生命科学分野の研究を総合的に支援する組織として、3つの主要な部門を有しています。生命科学研究推進部門では、分子・生体イメージング、発生工学、質量分析、バイオインフォマティクス、細胞解析といった先端技術を駆使し、研究者の研究活動を強力にサポートしています。施設・機器運用部門では、動物実験施設、植物実験施設、放射線実験施設などの高度な研究インフラを管理・運営し、研究の効率化を図っています。また、研究連携支援部門では、地域連携や国際



連携のネットワーク構築を推進するとともに、デジタル技術を活用して研究の効率化に貢献しています。

本センターでは、経験豊富な教員や技術職員が中心となり、各部門が密接に連携しながら、機器・施設の学内外での共用化を促進し、研究支援活動を展開しています。また、地域や国際的な研究機関との協力、産官学連携を通じて、学術研究の発展だけでなく、次世代の人材育成や健康社会の実現、さらにはグリーンバイオエコノミーの加速にも貢献することを目指しています。ぜひLiSCoのリソースを活用し、皆様の研究をさらに飛躍させてください。

実験施設紹介

1. 植物実験施設



遺伝子組換え植物と非組換え植物を栽培できる大型の温室が2棟あります。各部屋や人工気象室は、温度や照度、湿度を設定することができ、様々な植物を多様な生育条件で栽培することができます。

2. 動物実験施設



微生物学的に管理された実験動物が飼育されています。また動物実験を行うための環境が整備され、専門の職員による遺伝子改変動物の作製等の技術提供も行っています。利用者は定められた規則を遵守し、適正な自主管理のもと動物福祉に配慮した動物実験を行っています。

バイオサイエンス領域

最前線で胃を守れ -胃粘膜を保護する幹細胞分化制御のしくみを解明-

POINT

胃粘膜には、胃酸や消化酵素、粘液、消化管ホルモンを分泌する機能性細胞とそれらのターンオーバーを支える幹細胞が存在します。本研究では、EGFRシグナルが幹細胞から表層粘液細胞への分化を促進し、TNFシグナルが幹細胞の未分化維持に関与することを解明しました。



バイオサイエンス領域 幹細胞工学研究室
(左) 助教 高田 仁実 / (右) 教授 栗崎 晃

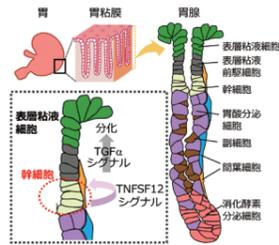
概要

胃粘膜に開口する胃腺には、胃酸や消化酵素を分泌する細胞が存在し、酸性の胃液を作り出すことで食物の分解と殺菌を行なっています。胃腺の表面は、表層粘液細胞で覆われており、粘液を分泌することで、胃を自己消化から守っています。表層粘液細胞は一週間程度で寿命を迎えるため、常に新しい細胞を供給する必要があります。この細胞のターンオーバーを支えているのが、胃腺の峽部に存在する幹細胞です。しかし、これまで、幹細胞がどのようなメカニズムで表層粘液細胞に分化するのか、その仕組みには不明な点が残されていました。

そこで私たちは、成体マウスの正常な胃組織を酵素処理して細胞をバラバラにし、1細胞遺伝子発現解析技術を用いて、胃腺を構成する1つ1つの遺伝子発現を

解析しました。この遺伝子発現データを用いて、幹細胞から表層粘液細胞への分化の過程で発現変動する遺伝子を特定し、それらの遺伝子発現を制御する上流シグナルを予測しました。さらに、胃腺の幹細胞を3次元培養して得られた胃幹細胞オルガノイドを用いて、予測されたシグナルの機能を検証した結果、EGFファミリーの一つであるTGF α シグナルが幹細胞から表層粘液細胞への分化を

促進すること、またサイトカインの1種であるTNFシグナルが幹細胞の未分化状態の維持に働くことを明らかにしました。以上の解析により、胃の恒常性を維持する幹細胞分化制御メカニズムを解明することに成功しました。



コメント

本研究では、胃の恒常性維持の中でも、特に幹細胞から表層粘液細胞への分化過程に焦点を当てて解析を行いました。研究の道は平坦ではなく、特に、シングルセル解析を行うために、胃組織を効率よく単離する最適な条件を見つけるまでに1年以上もの試行錯誤が続きました。データ解析から予測されたシグナル経路が実際に幹細胞分化制御に働くことを証明できた時には、全ての苦労が報われたと感じました。現在、私たちの研究室では、胃酸分泌細胞や消化酵素分泌細胞への分化を制御するシグナル経

路を探索する一方で、胃の発生過程や疾患における幹細胞分化制御メカニズムについての研究も進めています。一つの発見をもとに新たな疑問が生まれ、それがまた次の研究への扉を開く、という連続的なつながりを、研究室の学生と一緒に楽しんでいきたいと思っています。将来的には、本研究を基に、胃潰瘍や萎縮性胃炎などの胃疾患において、幹細胞分化を促進して胃腺の修復を促す新たな治療法の開発が可能になると考えられます。

詳細はこちら：<https://www.naist.jp/news/files/a918ba8336d1d11faa3276efa02c36fe7c74d34b.pdf>

物質創成科学領域

リスクと報酬の意思決定 バランスを光で調節 - 精神神経疾患の病態解明に期待 -

POINT

- ▶ 京都大学医学部伊佐教授研究室との5年以上にわたるJST-CREST共同研究の成果
- ▶ 本学で作製した独自のサル脳への光刺激と電気計測を行う集積型アレイデバイスを適用
- ▶ 我々の作製したデバイスを用いてサル脳の特定位点への選択的光刺激を行うことで、リスクと報酬(ギャンブル)の嗜好性を光により制御することに成功



研究推進機構 次世代生体医工学研究室
特定教授 太田 淳

概要

近年開発が進む光により生体機能を制御可能とする光遺伝学(Optogenetics)は、マウスなどげっ歯類を中心として神経科学の基本的なツールとして広く使用されています。これまでの電気刺激による制御と異なり、光遺伝学では光刺激により局所的、特異的に生体機能の制御が可能となり、医療への応用も期待されています。そのためには、よりヒトに近いサルを用いた実験が必要となります。光刺激用デバイスとしては、これまでマウス脳内に刺入して光を導入する光ファイバが一般的に用いられていますが、サル脳内への光刺激デバイスとしては光刺激領域が小さく適していません。サルを用いた運動制御の中核機構の研究で著名な京都大学医学部伊佐教授グループ(京大伊佐G)を研究代表としたJST-CREST「霊長類の大規模回路の光遺伝学的操作による高次脳機能の解明」に共同研究者として参加した我々奈良先端大グループは、サル脳表面の任

意の場所の光刺激を可能とする2次元アレイ光刺激と電気生理信号を取得できる2次元電極アレイを積層集積化した図1に示すサル用埋植デバイスを実現し、サル脳内で局所刺激とその電気応答を取得することに成功しました。このデバイスを用いて、局所的な光刺激によりサルのリスクと報酬(ギャンブル)の嗜好性を強めたり弱めたりできることが京大伊佐Gにより実証され、その成果はScience誌に掲載され大きな反響を呼びました。



図1：光刺激・計測電極積層2次元アレイデバイスの外観(左)とサル脳模型上設置(右)

コメント

本研究成果は、光刺激デバイスによりサルの生体機能の制御が可能であることを実証したものであり、医療応用への道を開く研究成果です。京大伊佐Gと多くの打合せを経て、埋植時の感触を掴んでもらうためのモックアップを作製、その結果をフィードバックしてデバイスを完成させていく行程は長い道のりでした。デバイス作製担当者がバイオサイエンス研究者でありまた高度なデバイス作製技術を有していたことで、京大伊佐G側の要望を正確に理解、反映させた画期的な光刺激・電気計測集積アレイデバイスの実

現が可能となりました。このデバイスをサル脳内に正確に埋植し長期動作を可能としたのは京大伊佐Gの高い埋植技術でした。京大伊佐Gでは得られた膨大なデータの解析を通じ、革新的な結果を得ることに成功しました。この研究が実を結ぶまでには5年以上の長い時間が必要でしたが、結果として我々の技術が新たな発見につながったことは工学研究者冥利に尽きるものと言えます。今後も真に役立つ融合研究に向けて一層精進していく所存です。

詳細はこちら：<https://www.naist.jp/pressrelease/240104.pdf>

共同研究

本学の研究および教育の活性化・高度化を推進し、社会との共創を進めるため、国内外の民間企業等との共同研究を積極的に行っています。個別のテーマ単位で取り組む従来型の共同研究にとどまらず、組織対組織の産学連携体制の整備を進めています。

受け入れ件数

202件

金額

380,914,963円

(2023年度)

共同研究室

産学連携研究の新たな取り組みとして、2023年度に共同研究室制度がスタートしました。特定のテーマを研究する「共同研究室」を民間企業等と設置することで、特定の企業と本学教員が連携して深く広く研究すること

が可能です。また、複数の企業と連携するコンソーシアム型の共同研究室を設置し、業種・業界を越えて研究に取り組むこともできる特徴があります。以下、2023年度に設置された3つの共同研究室を紹介いたします。

企業単独型

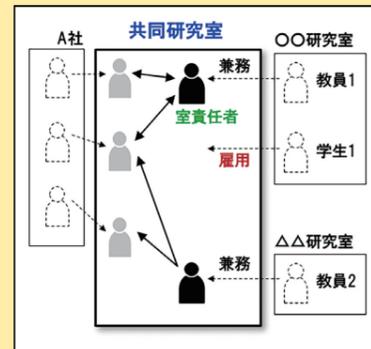
1社と複数テーマを研究

次世代生体医工研究室（株式会社ニデック）

人工視覚を代表とする次世代生体医工学に関する研究の推進を目的に研究室を設置し、株式会社ニデックと幅広く研究開発に取り組んでいます。

MuSASHi植物バイオ研究室（武蔵精密工業株式会社）

武蔵精密工業株式会社と密に連携して研究を推進し、植物の生産性やストレス耐性を強化する新たな因子に関する研究成果を応用することで、新規の持続型農業を推進する知財や技術を得るとともに、社会実装を目指すため設置されました。

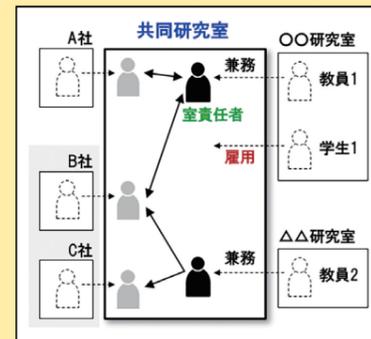


コンソーシアム型

複数社と個別テーマを研究

発酵科学研究室（武蔵精密工業株式会社・サラヤ株式会社株式会社クボタ・ベースフード株式会社）

モデル生物および産業微生物として重要な酵母を用い、新規な生命現象や分子機能を解析し、それらの理解を深めるとともに、高機能開発や代謝設計を行い、有用物質の発酵生産に資する研究を推進するために設置されました。業種を超えた4社と本学とで構成するコンソーシアム型の共同研究室です。



国際共同研究室

国際共同研究室は、共同研究の推進や国際ネットワーク拡大のため、海外の大学等と協力し設置しているもので、現在4つの研究室を設置しています。

NAIST-NYCU（台湾）

2023年5月に台湾の国立陽明交通大学 (National Yang Ming Chiao Tung University) と新たに設置したこの研究室では、バイオプロセス工学において必要不可欠な材料であるタンパク質結晶・集合体およびそれらに関連する分子性材料を、レーザーにより、ナノ・マイクロレベルで作製、評価するための手法を開発し、光科学を応用したバイオ技術、さらには医療技術への展開を目指しています。

産官学連携

本学では、研究成果の社会還元や国内外の機関との連携を通じて多角的かつ戦略的な産官学連携を進め、本学の研究および教育の活性化・高度化を推進しています。

特許権実施等収入額
(研究者1人当たり)

全国 **3位**

(2022年度)

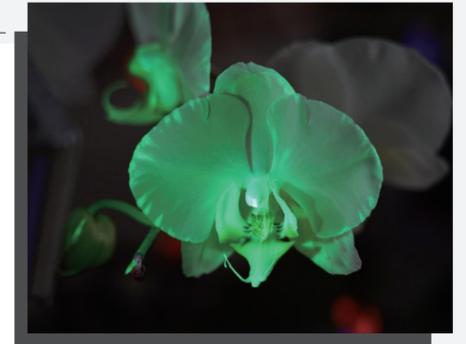
社会実装の事例

研究の成果を広く社会に還元するため、技術移転を積極的に推進しています。

CASE 01

光るコチョウラン

光るコチョウランは、ブラックライトをあてると、植物全体が黄緑色の蛍光を発するコチョウランで、国立大学法人千葉大学環境健康フィールド科学センターが、NECソリューションイノベータ株式会社の開発した蛍光遺伝子および加藤晃教授らが開発した植物において異種タンパク質の発現量を増強させる翻訳エンハンサーをコチョウランに導入して開発しました。翻訳エンハンサーは、蛍光強度の増大に寄与しています。



CASE 02

青いキク

2023年にサントリーフラワーズ株式会社が北米での販売を発表した花弁が青いキクには、加藤晃教授らの研究グループが開発した、植物において異種タンパク質の発現量を増強させる翻訳エンハンサーが導入されています。翻訳エンハンサーは、青色発色の増大に寄与しています。



CASE 03

泡盛 ZANPA 島バナナ酵母

高木博史特任教授、磯貝章太特任助教は、沖縄県の株式会社バイオジェットとの共同研究により、沖縄で栽培される島バナナの茎から新しい酵母を単離し、その特性を解析するとともに、バナナの主要な香り成分である酢酸イソアミルを高生産する菌株の育種に成功しました。この菌株を用いて泡盛(沖縄の蒸留酒)を醸造することで、バナナの香りを含むフルーティーで豊かな風味を特徴とする品質の高い泡盛が有限会社比嘉酒造から商品化されました。



地域との連携事業

地域共創推進室

REGIONAL CO-CREATION OFFICE

■ 概要

「地域共創推進室」は2021年4月に(株)南都銀行と共同で創設されました。当室は、「地方自治体」を始めとする地域市町村と連携の強化を図り、新たな経済社会の価値を創造するバックキャスト型研究開発、および社会変革を創出し、「産官学金共創システムの構築」を目指します。

VISION

地域の目指す未来像

(ビジョン)
～地域で織り成す未来のカタチ～

「人」が住みよい生活基盤の構築、「伝統産業」が持続的に発展するための産業基盤の確立、「環境」保全のための森林・水資源の管理を織り成し、持続可能な田園地域社会の復興を目指します。



四條畷市との高齢者見守りアプリの実証実験を支援

2022年
2月

2021年
10月

生駒市と包括連携協定を締結

地域共創推進室設置

2021年
4月



NAISMonの拡大

奈良日産(株)、地域コミュニティ(生駒市・けいはんな地区等)との「乗り捨て可能EVカーシェアリングシステム(NAISMon)」の拡大



NAIST STELLA
スタートアップ合宿開催



2023年
8月

AKATSUKI
プロジェクト始動



ARISAプロジェクト開始

AIロボット「ARISA (アリサ)」 (@近鉄大和西大寺駅) の外国語案内機能強化プロジェクトを開始～近畿日本鉄道との共同プロジェクト～

2023年
11月

奈良先端大 防災・減災
コンソーシアム設立

2023年
12月

日本貿易振興機構
(JETRO)と協定
を締結

2024年
2月

2024年
3月

大学発スタートアップの創出に向けた地域連携シンポジウムの開催

(主催:奈良先端大、共催:奈良県大学連合、後援:奈良県、奈良市、生駒市、南都銀行等)



ピックアップ事業

01 防災・減災コンソーシアム設立

2023年12月12日、「奈良先端大 防災・減災コンソーシアム」を設立しました。本学が誇る情報通信分野の先端技術を基盤に、地域の自治体や企業と協力して防災・減災に関する各種ソリューションを開発し、地域住民の安心・安全の確保、並びに地域経済の活性化や産業振興を目指しています。災害時の通信障害時に、避難所の状況把握や災害情報の発信を可能とする活動や、防災マップや被害予測マップを活用した避難所誘導や、停電の際に、ハイブリッドカーや電気自動車等を活用し、電源共有を可能とするサー

ビスの確立に資する活動を行う避難所デジタルマップワーキンググループと災害時における各種手続きを、先端技術を活用し簡素化、迅速化を促進する活動や自治体によるまちづくりにおいて、防災・減災につながるインフラ整備に資する活動を行う防災・減災DXワーキンググループの2つのワーキンググループを設置し実施しています。

02 乗り捨て可能EVカーシェアリングシステム (NAISMon)

2020年度より自動車用の後付可能なスマートロック及びEV用普通充電器を開発販売するジゴワッツ社、ブロック

チェーン技術研究開発の42社の協力のもと、決められた駐車場であれば、どこへでも自動車を返却できるうえ、自律的に有効な管理運用が果たせる「乗り捨て可能カーシェアリング」システムの実現のための実証研究に取り組み、2023年度からは、大学内の閉じたコミュニティ以外に、近接するけいはんな地区の事業所従業員からなる別コミュニティと自動車やステーションの一部共有を行い、拡張した活動フィールドでの自由な移動を可能とするメカニズムの実証を行っています。実証実験には、生駒市・四條畷市も参加しており、地域住民を含む多様なコミュニティを横断したカーシェアリングシステムへの拡張を目指しています。

03 AIロボット「ARISA」の外国語案内機能強化プロジェクト

このプロジェクトは、近畿日本鉄道が「近未来ステーション構想」の中で大和西大寺駅に設置しているAIロボット「ARISA(アリサ)」の外国語(英語・中国語・韓国語)での案内機能の強化を目的とするもので、地域共創推進室と近畿日本鉄道が2023年3月から実施している「鉄道事業における先端技術の活用に関する共同事業」の中のプロジェクトの一つです。奈良先端大の留学生9名が、近畿日本鉄道の近畿大西大寺駅2階コンコースにおいて、AIロボット「ARISA(アリサ)」の実機操作を行い、案内機能の評価を行いました。

AWARDS

受賞一覧

所 属	主催学会名 / 授賞団体	受賞名	受賞者名
情報科学領域	日刊工業新聞社 データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM)	内閣総理大臣賞 最優秀論文賞	松原 崇充(教授) 飯田 静空(M2)、若宮 翔子(准教授)、清水 伸幸(ヤフー株式会社)、藤田 澄男(ヤフー株式会社)、荒牧 英治(教授)
	DICOMO2023 シンポジウム 電子情報通信学会 メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会	ヤングリサーチャー賞 MVE 賞	伊勢田 氷琴(M2) 山岡 裕希(M2)、ベルスキア エルナンデス モニカ(助教)、磯山 直也(客員准教授)、内山 英昭(准教授)、清川 清(教授)、森本 社(阪大)
	IWSLT2023(The 20th International Conference of Spoken Language Translation) 日本医用画像工学会 (JAMIT) 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2023)	Best Student Paper Award 功績賞、功労賞 MIRU インタラクティブ発表賞	胡 尤佳(D2)、福田 りょう(D2)、西川 勇太(M1)、加納 保昌(D2)、須藤 克仁(准教授)、中村 哲(教授) 佐藤 嘉伸(教授) 大武 一平(M2)、北野和哉(助教)、柳田貴弘(客員助教)、藤村友貴(助教)、前島謙宣(オーエム・デジタル、MAGICAGROUP)、久保専之(千葉大)、松置 卓哉(准教授)、向川康博(教授)
	画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2023) 若手プログラム	MIRU 学生奨励賞 最優秀賞	日垣 輝大(M2) 鈴木 貴大(中京大学)、岡田 純京(東京電機大学)、岡本 夏旺(奈良先端大)、日垣 輝大(M2)、山崎 啓太(筑波大学大)、岩片 彰吾(早稲田大学)、荒川 深映(早稲田大学)
	2023 IEEE International Symposium on Electromagnetic Compatibility ICPhS 2023(The International Congress of Phonetic Sciences ICPhS 2023) YANS 分野交流ハッカソン NLP 若手の会 (YANS) 第 18 回シンポジウム Competition	2023 IEEE International Symposium on Electromagnetic Compatibility Best Paper Honorable Mention IPA Student Award 審査員特別賞と優秀賞 奨励賞 デモ賞 優秀研究賞 Presentation Award first prize	北澤 太基(D1)、高野 誠也(修了生)、林 優一(教授) 古川 慧(D1)、中村 哲(教授) 片山 歩希(M1)、馬越 雅人 (LINE)、加藤 大地 (東大)、亀井 遼平 (TohokuNLP) ①出口 祥之(D3) ②郷原 聖士(M1)③林 和樹(M1) 中谷 響(M1) 坂井 優介(D2)、上垣外 英剛(准教授)、林 克彦(北海道大学)、渡辺 太郎(教授) 乙部 達生(M2) Xin Wei(M2), Huakun Liu(M2), Felix Dollack, Monica Perusquia-Hernandez, Chirag Raman(Delft University of Technology), 内山 英昭(准教授)、清川 清(教授)
	情報処理学会 第 257 回自然言語処理研究会 International Comfort Congress 2023Competition The Emotion Physiology and Experience Collaboration (EPIc) Competition 日本ロボット学会	International Session Best Presentation Award Finalist 奨励賞 最優秀ポスター賞 SICE International Young Authors Award for IROS、IEEE Robotics and Automation Society Japan Joint Chapter Young Award	WU Po-Yen (D2) 坂本 龍士郎(M2) 北澤 太基(D1) 田原 熙昂(D2)
	日本医用画像工学会 ハードウェアセキュリティサマーセミナー 計測自動制御学会 (SICE)	奨励賞 最優秀ポスター賞 SICE International Young Authors Award for IROS、IEEE Robotics and Automation Society Japan Joint Chapter Young Award	中村 哲(教授) 佐藤 嘉伸(教授) Wiratmaja Christopher(D2)、笠原 正治(教授)
	IEEE (米国電気電子学会、Institute of Electrical and Electronics Engineers) The Medical Image Computing and Computer Assisted Intervention (MICCAI) Society The 5th Conference on Blockchain Research & Applications for Innovative Networks and Services (BRAINS 2023) The 22nd IEEE International Symposium on Mixed and Augmented Reality(ISMAR 2023) 2023 年度創発的先端シンポジウム	IEEE ライフフェローの称号 フェローの称号 Best Paper Award ISMAR 2023 Career Impact Award 優秀先端学生賞 優秀創発学生賞	加藤 博一(教授・副学長) 赤部 知也(D2) 田原 熙昂(D2)
	2023 博士キャリアメッセ KYOTO	鳥津製作所賞 スクリーンホールディングス賞 村田機械賞 三洋化成賞	Abraham Olufemi Abiodun(D3) Yohanssen Pratama(D3) Golbabaei Babak(D2) 立花 巧樹 (D2) 中田悠斗(M2)、劉海龍(助教)、平岡敏洋(一般財団法人日本自動車研究所)、和田隆広(教授)
	計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 2023 電子情報通信学会・通信ソサイエティ 環境電磁工学研究会 (EMCJ) の若手研究者発表会 国際シンポジウム CANDAR 2023 情報処理学会 第 258 回自然言語処理研究会 HCG シンポジウム 2023 2023 年ハードウェアセキュリティ研究会 公益社団法人計測自動制御学会 (SICE) 第 24 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2023)	住友電気工業賞 JIEP 電磁特性技術委員会賞 Outstanding Paper Award 優秀研究賞 学生優秀インタラクティブ発表賞 若手優秀賞 SI2023 優秀講演賞 優秀講演賞	西山 輝(D3) Le Vu Trung Duong(D2) 坂井 優介(D2)、ノヘイル アダム(D3)、上垣外 英剛(准教授)、渡辺 太郎(教授) 新江田航大(M1)、澤邊 太志(助教)、神原誠之(准教授)、藤本 崋一(助教)、加藤博一(教授・副学長) ①高野 誠也(修了生)②近藤 嵩之(M2)③阿部 虹稀(M2)④西山 輝(D3) ①Muhammad Akmal bin Mohammed Zaffir(M1)、和田 隆広(教授)②佐藤 瑛人(D1)、織田 泰彰(助教)、坂上 憲光(龍谷大学)、和田 隆広(教授)③乙部 達生(M2)、劉 海龍(准教授)、和田 隆広(教授)、坂上 憲光(龍谷大学)④織田 泰彰(助教)、藤江 謙伸(M2)、小國 隼介(M2) ①Muhammad Akmal bin Mohammed Zaffir(M2)、和田 隆広(教授)②佐藤 瑛人(D1)、織田 泰彰、坂上 憲光(龍谷大学)、和田 隆広(教授)③乙部 達生(M2)、劉 海龍(准教授)、和田 隆広(教授)、坂上 憲光(龍谷大学)④織田 泰彰(助教)、藤江 謙伸(M2)、小國 隼介(M2) ①郷原 聖士(M1)②林 純子(M1)
データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM) 日本データベース学会、電子情報通信学会 データ工学研究専門委員会、情報処理学会 データベースシステム研究会の主催	学生プレゼンテーション賞		
情報科学領域	言語処理学会年次大会		電子情報通信学会 情報・システムソサイエティ ソフトウェアサイエンス研究会 一般社団法人アジア太平洋機械翻訳協会 IEEE 関西支部
	第 30 回年次大会 委員特別賞 若手奨励賞 PKSHA Technology 賞 /Money Forward 賞 (スポンサー賞) SmartESG (シェルバ・アンド・カンパニー) 賞 (スポンサー賞) 研究奨励賞 最優秀賞 学生研究奨励賞		文部科学省 株式会社リバネス 日本植物形態学会 日本植物学会 2023博士キャリアメッセKYOTO 京都クオリアフォーラム 日本植物生理学会 米クラリベイト・アナリティクス社
バイオサイエンス領域	文部科学省 株式会社リバネス 日本植物形態学会 日本植物学会 2023博士キャリアメッセKYOTO 京都クオリアフォーラム 日本植物生理学会 米クラリベイト・アナリティクス社		日本セラミックス協会マテリアル・ファブ리케이션・デザイン研究会 長瀬科学技術振興財団 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第10回研究会 兼 第26回次世代先端光科学研究会 2023年日本化学会年会 第70回応用物理学会春季学術講演会 公益社団法人日本表面真空学会 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第11回研究会 兼 第27回次世代先端光科学研究会 国際会議International Conference on Photochemistry(ICP2023) 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第12回研究会 兼 第28回次世代先端光科学研究会 The23rd International Meeting on Information Display 一般財団法人電気学会 2022年映像情報メディア学会冬季大会 映像情報メディア学会 2023年年次大会 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2023) 電子情報通信学会 ソサイエティ大会(名古屋大学東山キャンパス)「第17回分子科学討論会」(主催:分子科学会) 第33回基礎有機化学討論会 日本物理学会第78回年次大会 9th International Tribology Conference, Fukuoka 2023 13回 d.lab-VDEC デザインアワード
	文部科学大臣表彰 科学技術賞 第 59 回 リバネス研究賞 incu・be 賞 平瀬賞 若手奨励賞 企業賞「三洋化成賞」 日本植物生理学会奨励賞 「Highly Cited Researchers 2023」選出		日本セラミックス協会マテリアル・ファブ리케이션・デザイン研究会 長瀬科学技術振興財団長瀬研究振興賞 講演奨励賞、若手奨励賞 学生講演賞 第 21 回応用物理学会 Poster Award 2022 年度日本表面真空学会論文賞 応用物理学会 新領域グループ講演奨励賞 次世代先端光科学研究会 若手奨励賞 "Springer-Nature PPS Poster Award" ポスター賞 講演奨励賞 若手奨励賞 ベストポスター賞 電気学会優秀論文発表賞 学生優秀発表賞 論文編集功労賞 SSDM Young Researcher Award エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 分子科学会優秀講演賞 ポスター賞 学生優秀発表賞 Best Poster 賞 VDEC デザインアワード優秀賞 VDEC デザインアワード奨励賞 ポスター賞 (second-place) Oral Presentation Award 関西電気化学奨励賞 講演奨励賞 若手奨励賞 学生優秀発表賞 Fellow の称号 若手奨励賞 / 安田幸夫賞 (口頭発表) 講演奨励賞 若手奨励賞 Best Poster Award キャラクターゼーション奨励賞
物質創成科学領域	日本セラミックス協会マテリアル・ファブ리케이션・デザイン研究会 長瀬科学技術振興財団 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第10回研究会 兼 第26回次世代先端光科学研究会 2023年日本化学会年会 第70回応用物理学会春季学術講演会 公益社団法人日本表面真空学会 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第11回研究会 兼 第27回次世代先端光科学研究会 国際会議International Conference on Photochemistry(ICP2023) 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第12回研究会 兼 第28回次世代先端光科学研究会 The23rd International Meeting on Information Display 一般財団法人電気学会 2022年映像情報メディア学会冬季大会 映像情報メディア学会 2023年年次大会 International Conference on Solid State Devices and Materials (SSDM2023) 電子情報通信学会 ソサイエティ大会(名古屋大学東山キャンパス)「第17回分子科学討論会」(主催:分子科学会) 第33回基礎有機化学討論会 日本物理学会第78回年次大会 9th International Tribology Conference, Fukuoka 2023 13回 d.lab-VDEC デザインアワード		キャラクターゼーション優秀賞 長瀬科学技術振興財団長瀬研究振興賞 講演奨励賞、若手奨励賞 学生講演賞 第 21 回応用物理学会 Poster Award 2022 年度日本表面真空学会論文賞 応用物理学会 新領域グループ講演奨励賞 次世代先端光科学研究会 若手奨励賞 "Springer-Nature PPS Poster Award" ポスター賞 講演奨励賞 若手奨励賞 ベストポスター賞 電気学会優秀論文発表賞 学生優秀発表賞 論文編集功労賞 SSDM Young Researcher Award エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞 分子科学会優秀講演賞 ポスター賞 学生優秀発表賞 Best Poster 賞 VDEC デザインアワード優秀賞 VDEC デザインアワード奨励賞 ポスター賞 (second-place) Oral Presentation Award 関西電気化学奨励賞 講演奨励賞 若手奨励賞 学生優秀発表賞 Fellow の称号 若手奨励賞 / 安田幸夫賞 (口頭発表) 講演奨励賞 若手奨励賞 Best Poster Award キャラクターゼーション奨励賞
	The 13th The Eye and The Chip World Research Congress The International Conference on Applied Physics and Materials Applications (ICAPMA2023) 2023年度第3回関西電気化学研究会 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ13回研究会 兼 第29回次世代先端光科学研究会 2023年映像情報メディア学会年次大会 米国電気電子学会(IEEE: The Institute of Electrical and Electronics Engineers) 第29回電子デバイス界面テクノロジー研究会 応用物理学会 極限的励起状態の形成と量子エネルギー変換研究グループ第14回研究会 兼 第30回次世代先端光科学研究会 国際学会18th International Thin-Film Transistor Conference (ITC 2024) 第19回日本セラミックス協会マテリアル・ファブ리케이션・デザイン研究会		①竹淵 優馬(D3)②岡崎 魁(D1) 森本 積(准教授) ①西川 見弘(M2)②竹淵 優馬(D3)③市場 賢政(D1)④青木 瑞晃(M2) Jeevithra Dewi Subramaniam(D3) 岡崎 魁(M2) 服部 賢(准教授) 岡崎 魁(D1) ①市場 賢政(D1)②西川 見弘(M2)③山林 恵士(M1) Magin Benedict Ferrer(D2) 高瀬 峻汰(M1) ①國方 俊彰(D1)②西川 見弘(M2)③山林 恵士(M1) キャンデル グレイス パレデス クイノ(D3) 山崎 勇輝(D2) 堀木 雄介(修了生) 太田 淳(教授・副学長) 岡田 竜馬(D2) 岡田 竜馬(D2) Garrek Stemo(D3) 笠倉 望路(M1) 盛喜球也(M2) 長谷川 菜(D2) 中西 優輝(D1) 岡田 竜馬(D2) Kuang-Chih TSO(博士研究員) ①竹淵 優馬(D3)②岡崎 魁(D1) 吉原宏樹(M2) 尾川 祥太(M1) ①市場 賢政(D1)②松澤 隼(M2)③江澤 喜朗(M1) 高田 奎之心(M2) 教浦南行治(教授) 高橋 崇典(助教) 遠藤 優介(M1) ①松澤 隼(M2)②宮崎 慧一郎(M2)③山林 恵士(M1) Nu Myat Thazin(D2) 宮崎 慧一郎(D1)

※2023 年 4 月から 2024 年 3 月までに受賞したものを掲載

決算情報から見る 本学の教育研究活動の推進方策

学生一人当たりの教育費 2023年度

「NAIST」は **52.5万円** 約1.7倍
 全国国立大学平均 **30.4万円**

学生一人当たりの教育費とは、損益計算書に記載されている教育経費(教職員の人件費や一般管理費等については含まれていない)を学生数^{※1}で割ることで、教育活動への投資額を学生一人当たりで示した指標であり、この数値が大きいほど、学生一人当たりにかけられた教育経費が高いことを示しています。

本学は52.5万円と、全国国立大学の平均値30.4万円よりも1.7倍ほど高い数値です。2023年度は、全国国立大学法人82法人中、11番目に高い数値でした。

※1 学生数:2023年5月1日現在の学士課程、修士課程、博士課程、専門職学位課程の在籍者

教員一人当たりの研究費 2023年度

「NAIST」は **1815.2万円** 約1.9倍
 全国国立大学平均 **971.3万円**

∥ 全国立大学中 **5位** ∥

教員一人当たりの研究費とは、損益計算書に記載されている研究に関する経費^{※1}(教職員の人件費や一般管理費等については含まれていない)を教員数^{※2}で割ることで、研究活動への投資額を教員一人当たりで示した指標であり、この数値が大きいほど、教員一人当たりの研究活動費が大きいことを示しています。

本学は1815.2万円と、全国国立大学の平均値971.3万円よりも1.9倍ほど高い数値です。2023年度は、全国国立大学法人82法人中、5番目に高い数値でした。

※1 研究経費+受託研究費+共同研究費+科学研究費補助金(直接経費)

※2 常勤教員(任期付教員を含む)に係る給与の年間平均支給人員数

奈良先端大における中長期的な財務戦略

中期目標の達成、中期計画の実施や学長ビジョン2030の実現には、中長期的に安定的な財源確保が重要な課題となっています。将来にわたって、本学の役割を果たし続けていくため、積極的な競争的研究費の獲得に加え、産業界や社会との連携を推進することで、財源の多元化を図るとともに、資金獲得力の基盤となる教育研究環境の整備に積極的に投資することで、財務体質強化の好循環に努めます。

また、向こう5年間に的中長期的な財政シミュレーションを定期的に更新し、役員間で共有することにより、中長期的な財務状況を俯瞰しながら問題意識を持ち、中長期的な事業計画のみならず、各年度の戦略的・計画的な予算編成に活用しています。

財務体質強化に向けた取り組み

国立大学法人化以降、運営費交付金収入が徐々に減少していき、経営基盤の安定化のために、概算要求による組織整備、大型設備の調達等のための資金獲得、法人評価に基づく増額配分に向けた取り組みに努めています。

また、以下のように財源の多様化に向けた収入獲得の取り組みを行うほか、支出管理の適正化に努めています。

収入獲得

URAを活用した
外部資金獲得力の強化

専門人材を活用したブランディング強化による
ステークホルダーからの支援の拡充

課題創出連携研究事業実施や共同
研究室設置による産学連携の推進

外部資金における
間接経費率の見直し

サポーター組織の新設による
寄附金獲得強化

ネーミングライツの拡充による
民間資金の活用

支出管理

学長ビジョン2030実現に向けた重点配分や
成果を踏まえた戦略的予算編成の実施

全ての予算を対象とした
支出経費の見直し

計画的な設備改修や節電WEBを活用した
省エネ機器の導入推進

財務担当理事に聞く 奈良先端大の 財務状況



財務担当理事 小谷 直和

私たち奈良先端科学技術大学院大学に関心を寄せていただき、このレポートをお読みいただいたことにお礼申し上げます。国立大学法人は、教育研究に対する国民の要請にこたえることを使命として法律に基づき設立され、国の関与の下で定められた中期目標・中期計画に従って業務運営を行うことが求められています。しかしながら、活動の基盤となる国からの運営費交付金の減額、円安や物価高騰などによる実質予算の目減りが続いております。各国立大学法人では、人件費や物件費の削減、あるいは授業料の値上げなどに

頼らざるを得ない状況に追い込まれ、2024年6月、国立大学協会として「我が国の輝ける未来のために」声明を発表し、「もう限界です」と訴えたところです。本学の2023年度決算においても、運営費交付金収益の減となる中、教職員人件費の縮減などのやりくりにより、3.6億円の当期純利益を計上した一方で、貸借対照表では、この当期未処分利益を加えても、純資産は対前年度3億円の減と、将来に渡って教育研究を高めていく基盤が減少する厳しい状況が示されました。国の予算の厳しい折ですが、本学では、国立大学法人制度の趣旨を踏まえ、教育研究等の大学の諸機能の最大化や、より十全な高等教育の機会均等の実現に教職員一丸となって取り組んでまいります。今後とも、本学に対する御理解・御支援を賜りますようお願い申し上げます。



奈良先端大サポーターズクラブ
<https://www.naist.jp/naist-supporters-club/>

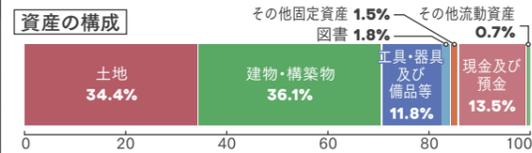


奈良先端大基金
<https://www.naist.jp/kikin/index.html>

資産等の現状

貸借対照表 2023年度

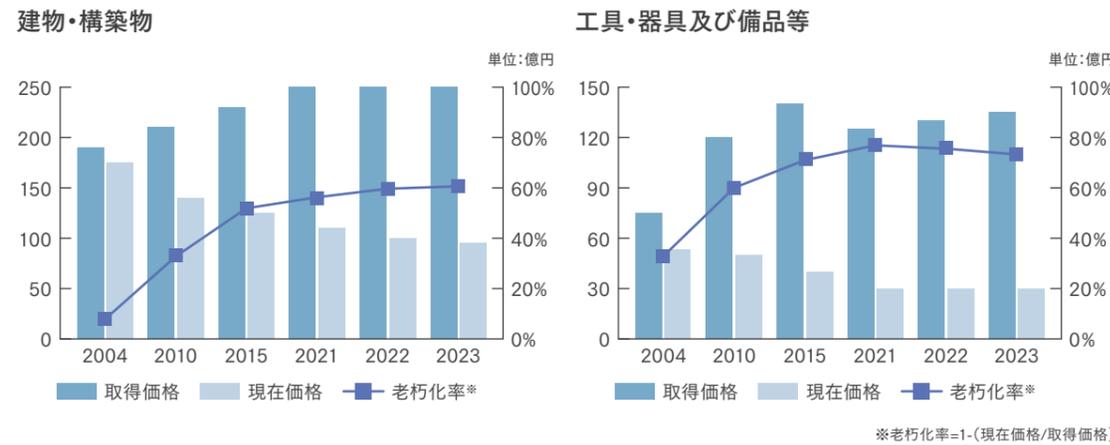
資産の部				負債の部			
	2023年度	(2022年度)	増減		2023年度	(2022年度)	増減
固定資産				負債計	4,126	(3,647)	479
土地	9,276	(9,276)	0	純資産の部			
建物・構築物等	9,730	(10,394)	▲663	2023年度	(2022年度)	増減	
工具・器具及び備品等	3,187	(2,864)	322	資本金	18,264	(18,264)	0
図書	488	(491)	▲2	資本剰余金	▲571	(86)	▲658
その他の固定資産	405	(405)	▲1	利益剰余金	4,753	(4,402)	351
固定資産計	23,090	(23,434)	▲343	当期末処分利益	361	(3,494)	▲3,132
流動資産				純資産計	22,806	(23,113)	▲306
現金及び預金	3,643	(3,167)	475	負債・純資産計	26,933	(26,761)	172
未収入金等	164	(135)	28				
その他の流動資産	35	(23)	12				
流動資産計	3,843	(3,326)	516				
資産計	26,933	(26,761)	172				



土地・建物・研究機器などの固定資産は、国立大学法人の使命である教育研究活動を行うための重要な基盤となっており、全体の85%を占めています。

※端数処理(切り捨て)に伴い、合計等は必ずしも一致しない。

施設等取得額・老朽化率の推移



2023年度決算ポイント

建物等の老朽化が進んでいるものの、教育研究の要となる研究機器等の設備更新を継続的に行っており、結果として**教育研究環境の維持につながっています。**

資産については、教育研究施設・設備の老朽化(減価償却)が新規取得額を上回った結果、2023年度の資産合計額は前年度より約1.7億円減少する結果となりました。減価償却による老朽化等により教育研究活動が停滞しないよう、減価償却引当特定資産等の制度を活用しながら施設・設備の計画的な更新を進めてまいります。

収入と支出の現状

損益計算書 2023年度

費用の部				収益の部			
	2023年度	(2022年度)	増減		2023年度	(2022年度)	増減
経常費用				経常収益			
教育経費	606	(561)	44	運営費交付金収益	5,376	(5,795)	▲419
研究経費	1,206	(1,287)	▲80	学生納付金収益	677	(661)	15
教育研究支援経費	956	(1,058)	▲102	受託研究等収益	1,685	(1,500)	185
受託研究費等	1,584	(1,491)	92	寄付金収益	372	(448)	▲76
人件費	3,715	(3,937)	▲222	補助金等収益	276	(374)	▲97
一般管理費	321	(338)	▲17	科研費等間接経費	214	(248)	▲34
その他	53	(42)	10	その他収益	194	(257)	▲62
経常費用計	8,444	(8,718)	▲273	経常収益計	8,797	(9,286)	▲489
当期純利益	361	(3,494)	▲3,132	目的積立金取崩額	8	(20)	▲11

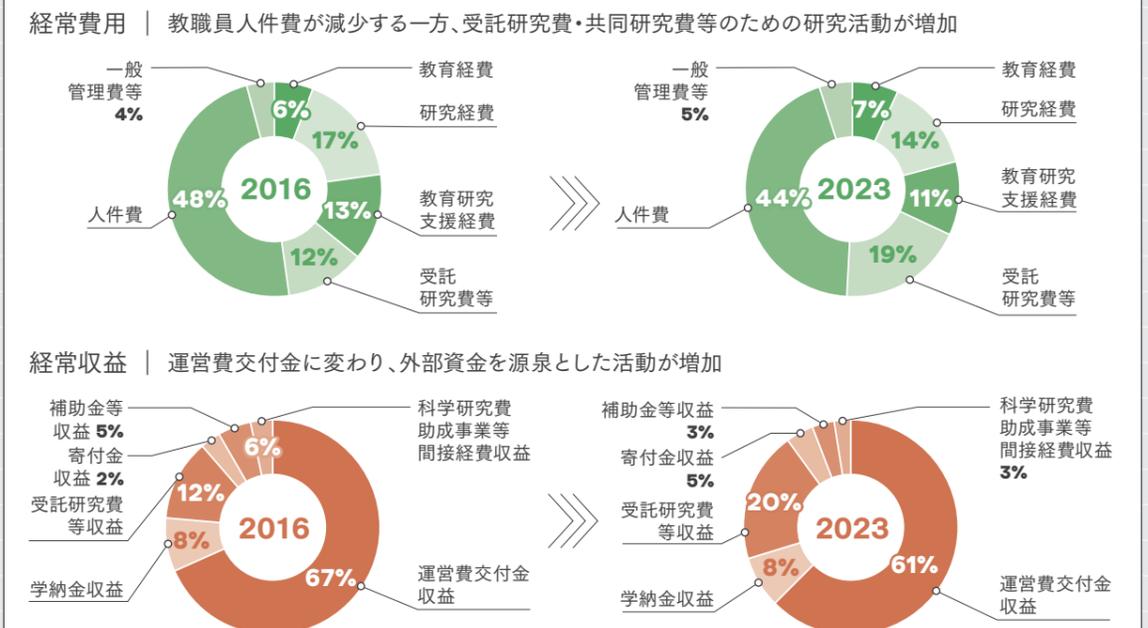
※端数処理(切り捨て)に伴い、合計等は必ずしも一致しない。

2023年度決算ポイント

収益が昨年度よりも下回るものの、**財政効率化の結果、黒字決算を維持**

収益面では、設備関係の運営費交付金交付額の減少と運営費交付金債務の繰越等により、前年度より4.9億円減少しましたが、費用面では、財政均衡化を図るための各種施策による人件費の減少、電気代高騰を乗り切るための省電力への取り組み等の結果、前年度より2.7億円減少しました。この結果、2023年度は3.6億円の利益が生じました。当該利益は翌期以降の事業の財源として活用できる目的積立金として申請し、施設整備等をはじめとした様々な事業を通じて今後の更なる教育研究活動の推進に役立てる予定です。

第3期中期目標期間初年度(2016年度)との経常費用・経常収益の内訳比較

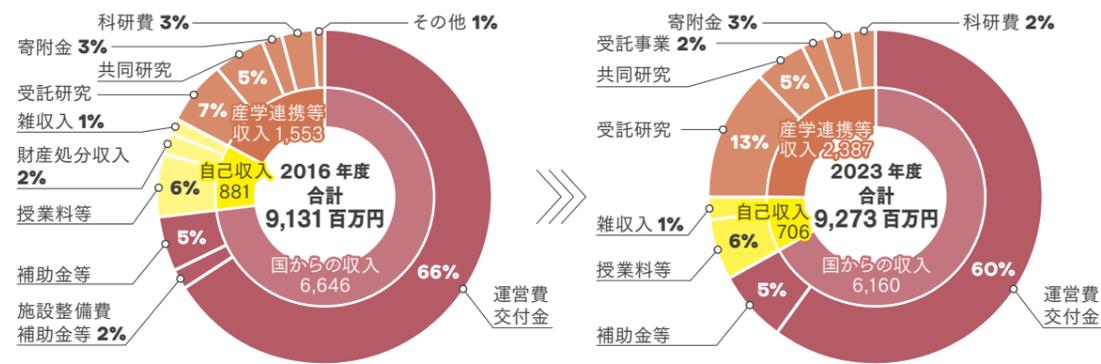


収入財源の多元化に向けた取り組み

第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての収入構造の推移



第3期中期目標期間初年度(2016年度)との収入構造比較



2023年度決算ポイント

運営費交付金に依存した収入構造からの脱却を目指し、財源の多元化に向けて**外部資金の獲得拡大を推進**

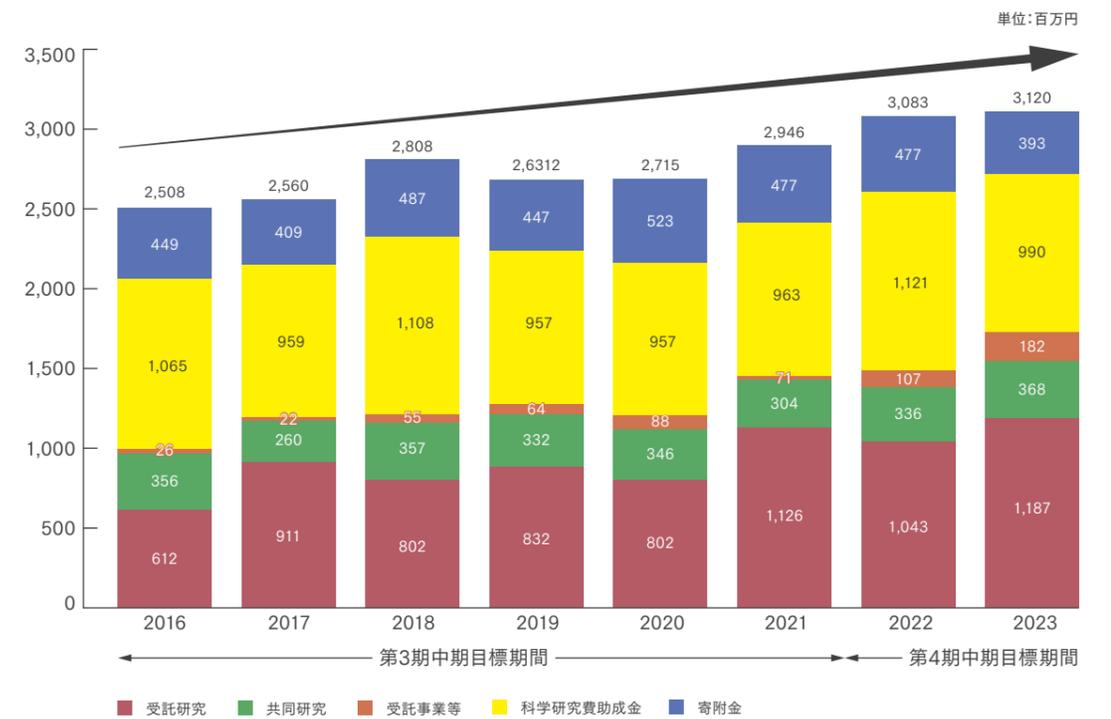
本学の収入は、主に運営費交付金・自己収入・産学連携等収入及び寄附金収入で構成されており、多種多様な財源で様々な教育研究活動等を実施しています。収入の大半は、現在においても国から交付される運営費交付金収入となっておりますが、第3期中期目標期間中から第4期にかけて多様な財源確保を目指した結果、第3期中期目標期間初年度と比較すると産学連携等収入の獲得額及び収入に占める割合が増加(獲得額約8億円増、収入に占める割合約8%増)しています。今後も、多様な財源の確保に取り組むことにより、第3期中期目標期間(2016-2021年度)における総事業規模(約560億)を超える事業規模の拡大を目指します。

外部資金の獲得状況

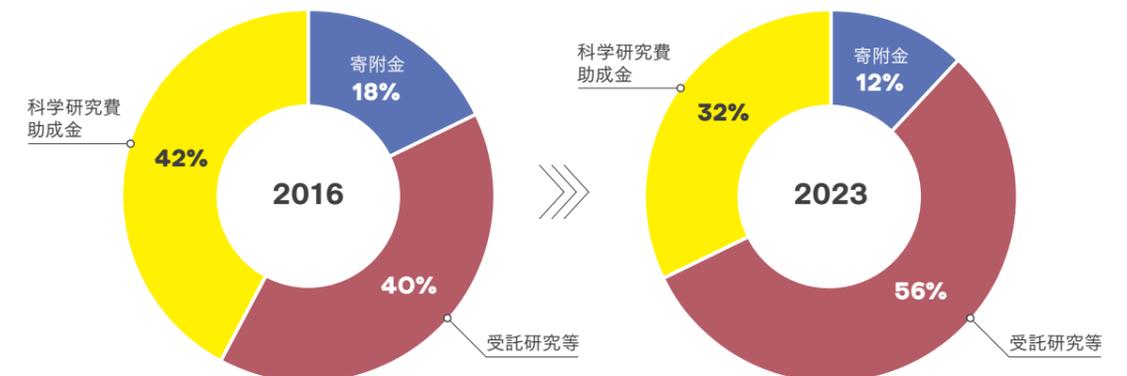
2023年度決算ポイント

学長ビジョン2030に掲げる「財源の多元化による財務基盤の安定化」の実現に向けて受託研究費が大きく増加する一方、科学研究費助成金収入が前年度から大きく減少し、研究資金のバランスが変化

第3期中期目標期間から第4期中期目標期間にかけての外部資金獲得額の内訳推移



第3期中期目標期間初年度(2016年度)との外部資金獲得額の内訳比較





奈良先端大サポーターズクラブ NAIST SUPPORTERS CLUB

本学の人材育成の取り組みを継続的にご支援いただくとともに、会員の皆さまと大学、さらには会員間の連携を促し、交流や親睦、共創による相互の発展を目的とした会です。会員の皆さまに大学のリソースをご活用いただくための専用の相談窓口の設置や成果報告会の開催、各種行事へのご招待など、双方向のコミュニケーションを活性化することで、社会との間に「共創の輪」を広げて行きたいと考えています。皆さまのご入会をお待ちしております。

サポーターズクラブの詳細、お申込み方法等はこちら ▶

<https://www.naist.jp/naist-supporters-club/>



奈良先端大基金 NAIST FUND

世界トップレベルの教育研究拠点の形成に向け、本学における教育研究、社会貢献及び国際交流の一層の推進並びに教育研究環境の整備充実を図ることを目的とした基金を設置しております。使途を大学にお任せいただける場合は「奈良先端大基金」へ、特定の使途へのご支援を希望される場合は、ご希望の種類の特定基金へのご寄附をお願いいたします。皆さまのご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

奈良先端大基金の詳細、お申込み方法等はこちら ▶

<https://www.naist.jp/kikin/index.html>



Annualレポートに関する
ご意見・ご感想はこちら

<https://ssl.form-mailer.jp/fms/eddc894a837151>

このAnnualレポートは、事務
職員の有志によるAnnualレ
ポートWGにより作成しました！

企画・編集・発行 国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学
AnnualレポートWG

- 構成員 - 多井真一 後藤美沙子 小林紗英 光野征広
山田佳乃 奥田菜月 辻上尚美 弓良美桜